

資料紹介

歌舞伎台帳『新板越白浪』(上・翻刻編)

原直史

はじめに

本稿は国立国会図書館所蔵の歌舞伎台帳(台本)を翻刻紹介するものである。この作品「新板越白浪」は、以下の翻刻からわかるように嘉永四年(一八五二)の秋狂言として作られた。伊原敏郎『歌舞伎年表』第六卷(一九六一年、岩波書店)によれば、本作は九月七日から江戸市村座にかけられた。本台帳からも、主人公たる鬼神のお松を初代板東しうか(一八一三―一五五)、準主役の夏目四郎三郎を八代目市川団十郎(一八二三―一五四)、敵役鹿野苑軍八を五代目大谷友右衛門(一八三三―一七三)などが演じたことが知れる。

本誌で本作をとりあげる最大の理由は、本作が新潟・寺泊など越後を舞台に設定しているためである。本作は主家転覆を企む敵役が重宝を盗み出し、これを主人公達がたずねる「刀の詮議」の典型的な筋書きを土台とし、これに人気の盗賊自来也(見雷也)の女性版を登場させながら、複雑に絡み合う主従の義理や親子夫婦の恩愛と、それと知らずに殺し合ってしまう悲劇を擲めた作品であるが、主人公鬼神のお松は「黒姫山」で自来也に掠われ謀計でこれを殺した後「二代目自来也」となり盗賊行為を刀詮議の手段とする一方、「新潟」の「古町」「六の町」で剣術道場を開き昼

の顔としている。道場には「八彦(弥彦)大明神」の画像が飾られ、主人公は「白山様」に願を懸ける。近隣には「三条長岡上下」の船宿があり、「のつたり(沼垂)」への行き来や「だっほん小路を奢る」という表現も見られ、坂内小路をもじった「小路伴内」という人物さえ登場する。

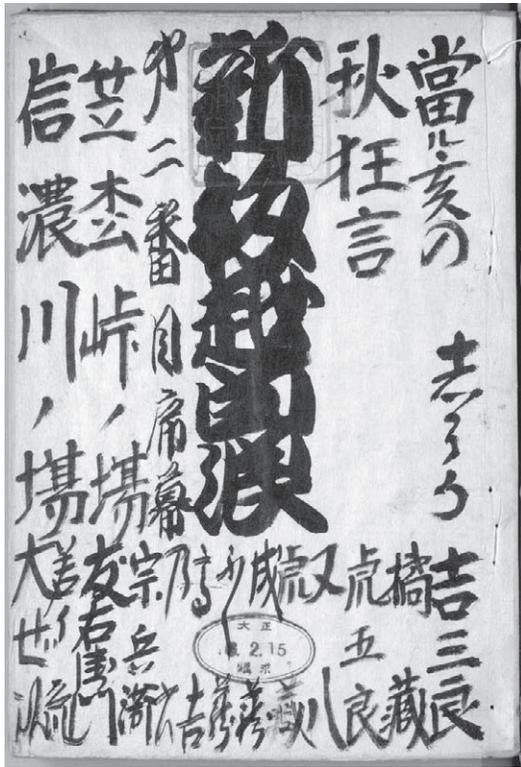
このように本作にちりばめられた新潟周辺の諸要素は、あまりにも具体的に異様ですらある。江戸の観衆のどれだけが、「だっほん小路」が新潟の遊所であることを知っているであろうか。なぜこのような作品が作られたのか。本号ではまずその全文を翻刻紹介し、次号では拙いながらその考察をしようと思う。

もとより近世文学研究には専門外の筆者のこととて、勘違いも多かるうと思われる。ご叱正を仰ぐ次第である。

【凡例】

国立国会図書館所蔵の底本(請求記号八二四―二)の原形がわかるように努めたが、適宜以下の処理を加えた。

- 1 團↓団、國↓国 など旧字体は原則的に常用漢字に改めた。
- 2 底本に付されていない句読点を補うことは行わなかった。
- 3 仮名書きに漢字をあてることも敢えて行わなかった。なお変



体仮名は現行の仮名に改めた。

4 「より」の合字「夕」、語尾の「ます」の宛字「升」は底本通りとした。一方「ござる」の合字「ム」は仮名に直した。

5 極端な宛字や仮名遣いのゆれも底本の雰囲気を残すために改めなかった。

6 文中の位置を考察編で示すために(○丁オ)等の記載を付記した。

7 本文中に特定の疾患に対する差別的な表現が見られるが、歴史的文献であることを考慮しそのまま掲載した。もとより差別を容認するものではない。

【翻刻】

(表紙題箋)

「松島松作芝居台帳 五」

(扉)

当ル亥の

しうか 吉三良

秋狂言

橘蔵

新板 越 白浪

又八 虎五良

第二番目序幕

又八 虎蔵

笠松峠ノ場

成蔵

信濃川ノ場

ふく蔵

高吉

乃六

宗兵衛

友右衛門

若イ衆

大ぜい

(二丁オ)

本舞台正面一間の浜納屋の雨戸側に捨礎上下に磯の張りもの松の立木日覆おひ分同釣枝向小高キ浪手摺後口浅黄幕爰ぎまくに丸物まわもののてんま壺艘伏そうふくせて有成蔵襦伴細帯鉢巻にて鉄槌てつちを持まいはだを打て居る側に橘蔵町人の形にて尻からげ手拭に刷毛を二三枚ト小刀をくるみ提ひけて居る都而越後新潟浜町の模様波の音在郷歌にて幕明橘蔵 成程おまへ方の商売もたんせいなものだねへ

成蔵

イヤモチつと捨て置とあかゝ廻ツて成り升せぬそうして
おまへハどこへ仕事に

橘

わしやア三文盃へモウそろ／＼寒空にむかつたかトセう
じを張りに行升た

成

ア、さやうかねしかし同じ家業でも経師屋なぞハ寄麗きれいな
商売またわしらハ舟乗りをがきの時分からして居るがど
うぞ早く切り上たいたいものだ

橘

何おまへなんに成ツても楽ハさせ升せぬわな
うさアねへハ、、

成

ト矢張り右の鳴物に成りとら蔵又八さんすいなる侍
の拵へそぼろなる

(二丁ウ)

浪人の形り福蔵高吉乃六何れも少し酔よふたるこな
しにて出て来り

とら蔵

ヨウおぬしハ宇佐美源吾だなアどこへいつたのだへ

橘

皆さんお揃ひでござり升な

又八

お揃ひで銭なしが聞てあきれらアそれに引かへおぬしハ
工面を直したなア

とら

ほんにそうよなアおいら達も鎌倉かまくらにまじめで居た時分ハ
お主シハ夏目四郎左衛門どの、所の若徒わかしういで有ツたけ

福蔵

こちとらが夏目へ劔術けんじゆつの稽古けいこに行く時分ときぶんハいちめてや
つたけなア

高吉

夏目の親仁おやしが腹を切ツて後うしろテ五十嵐典膳いそどのが殿とのの師範しはん
に成ツたから跡あとハちり／＼

乃六

おぬしハ兄貴あにきの磯平いそへいを便たよツて此越後路へ来て此頃このときじゃア

とら

経師屋商売ヲして居るそうだな
若徒わかしうい奉公ほうこうするよりはるかましだろうそりやアそうとア
ノ時分ときぶん此越後から鎌倉へ養子よやしにいつた夏目四郎三郎とい
ふやつあれツきりちくてんして

(二丁オ)

仕まつたなア

橘

サアどこにどうしてお出なさるやら

又

それも其筈そのはず養子親よやしおやの四郎太夫親仁おやぢめが切腹せつぷくの場所ばにも居
合さず又此国屋敷このくにやしきでハ実父じつふの速見すみ甚左衛門しんざゑもんハ殿とのから預り
の刀をなくして今に閉門へいもん

とら

モウ日延ひのちのの日限も切れるとの噂うわさどうして古郷ふるさとの此土地へ
あしぶみもなるまい

福

慥たしかかアノ四郎三郎といふやつハ夏目へ養子よやしにこねへ前ハ
速見雅次郎すみまさじらうといつたツけなア

成

ヤレ／＼よふ／＼の事でまいはだを打ツて仕まつた

乃

ト大きくいふ
なんだ此男このおとこハ藪やぶから棒ぼうに

成

今おまへ方が腰懸こしかけにこまるふと舟底ふねぞこをきれいにして上た
のじゃ

高

そいつハありがたい

成

経師屋さんわしも是からのつたりへ笛ふえの稽古けいこに行いくからそ
こらまで一所に

橘

ほんにそうし升ふ

(二丁ウ)

とら

そんなら源吾げんご此頃このときに

五人 遊びに行ぞよ
橋 招待申ており升る
成 サア行升ふ

ト浪の音に成り成蔵橋蔵向ふへは入る此内橋懸りよ
り宗兵衛すいの張りくり下ケ黒羽二重大小浪人の
拵へにて出て来り

宗兵へ おぬし達ハそこにいたか

とら ヲ、お手前ハ村越

五人 伝蔵どの

宗 なんだ岩舟地藏のよふに船底へ乗ッて何をして居るのだ

乃 モウさむ風が立ッてきたから

又 貴公を待ながら日なたぼつこだ

宗 成程ゆうてうな手合だそれより此中からおぬし達を頼ん

だ小路伴内

(三丁オ)

どの、一件ハどうしてくれたまだ典膳に○イヤ此国へ来
てハ名もかわつて鹿野苑軍八きやつにそういつてくれた
か

又 いふ事ハ毎日のよふにいふがそらつぷいてさつぱりとり
合ぬから

宗 そんならモウい、おぬし達ハたのまねへ今おれや伴内ど
のが陣屋へ行れぬからだゝからい、事にしやアがつて取
合ねへのだなアな是此ぢうも咄す通りおと、しの暮鎌倉
でアノ軍八めがいふにハ国屋敷の宝に成つてゐる小狐
丸の刀を去る大身ンがこんもうゆへ盗んでくれとたのみ

だから甚右衛門が預りのすきを伺ひ伴内とおれとひつ盗
んで鎌倉へ送ッてやつたら飛脚便りに二人りが中へたつ
た十両礼だとぬかしてよこしやアがつたがよし／＼鎌倉
出府の時たんまりゆするふと思つてゐる間にがら／＼しく
じり国やしきへばいまくられ五十嵐の苗跡もけづられて
今じやア鹿野苑軍八と名のり爰の陣屋の留守居格モウベ
ん／＼としちやアいらねへあいつが詰め所へらんぼう
にあばれ込ミ何もかもぶちまけてだいでごかうふるわせ
てやらにやアならねへ

(三丁ウ)

又 ア、コレそれハあんまり短気だ

とら おぬし計りじやアねへ高くハいわれねへが夏目のおいほ

れハしつての通り

福 われ／＼が手伝ッてやミ打にして細工をきれいに切腹し

たつもりにもまくやらかし

高 跡の師範ハ軍八を立たれどその骨折しろハ今にくだらね

へ

その時迄四郎太夫に預け置た文宣王の黄金の像の盗んだ
のを褒美をやる迄のそくたくだといつておいら五人の中
へ預けた俵

とら しらん顔の半兵衛よ

乃 フムそうして其像とやらハ持て居るか

宗 いつでもふんどしにくるんで則是に渡らせ給ふ

又 ト帛包の尊像を見せる

宗 よし／＼少シでもかたが取て有る所がつかまへものだぞ

ういふ事ならおれが書いて来た此手紙よんできかず聞や
れ〇 ト懐中分状を出シ

一昨年極月御頼に付甚右衛門預りの小狐丸の刀盗取差上
候褒美の跡金まつた其許鎌倉におみて夏目四郎太夫を切
害

(四丁オ)

の砌り五人の者御助力致し候故首尾しお、せあんのんに
居られ候を今以て何ンの挨拶もなく甚心外に候早速御
むくい是なきに於てハ我くが命がを的に家老衆中へ訴
人仕るべく候鹿野苑軍八殿へ小路伴内村越伝蔵外六人〇
サ是を届けたら本直を出すに違へねへ

又 ヨシく早速軍八が帰りを待ッておれがしつかり届けて
くりやう

ト受取内懐口へ入れる

宗 イヤ帰りといへば伴内殿が近習役を勤めていた時より同
家中名越長兵衛が妹の美鳥いろく口説けど言号の雅
次郎に操を立て聞入ぬごうぜう所が夜船で此新潟へ下り
白山の宮へ参詣にいつたとの事どふせ戻りハ三文盗道に
待ぶせひつとらへて伴内殿の日頃の望ミをはらさせにや
ア成らぬがどふかおぬし達も手伝ッて

(四丁ウ)

とら そりや安イ事だしかしばんにハだつぽん小路をおごるだ
ろう

宗 いふ迄もねへ惣あげにしてより取りだ

福 そいつハきめう

又 おれハいつたんやしきへ帰ッて軍八へ此状をわたしたう
へ

高 用がすんだらいつもの内へ

とら 咄ハ道く

宗 サア来やれ

トこなし浪の音にて皆く上手へは入る上下の張物
引て後口切て落ス

本舞台向山幕上手山のなだれの張り物真中松並木能キ所に笠松峠
と印せし石の勝示杭日覆分松の釣枝山おろしにて道具
納る

ト山おろし向ふ分旅人若イ衆の仕出シ三人捨ぜりふ
にて出て

(五丁オ)

来る上手分錦八百性の形りくわへきせる塔婆を持
出て来り旅人に行合

□ モシなんと明るひ内に赤塚迄ゆかれ升ふかね

錦八 此衆達ハとほうもない此笠松峠ハ上り三里ハラくだが下
りの三里ハ六七里にも向ふなんじよだものを川端迄行ぬ
内に日ハ暮て仕舞升ハ

△ それバ大そふどうだしかし跡へ帰るもむだな咄しだから

急いで下ろうでハ有まいか

三人 成程それより外しようが有まい

錦 そりや命がおしくなくバ勝手にさつしやるがよい

○ 此人ハとほうもねへ事をいふせつねへおめへをしてこん

な峠を越すのも女房子をすごして長いきをせうと思ふから
の事だ

錦 サア幾ら長生イキをしたくても三人ながらどうして夜中迄持
(五丁ウ) ものか

三人 そりや又なせく

錦 ハテ此節ハなんとかいふむづかしい名の大どろ坊が此近
所に住んで夕方から先キハ旅人たびでも所の者でも切殺こころして
ねこんぜいとるゆへ今頃からハ往来ハとまり升ハ

三人 ヨウ

錦 コレ見さつしやれ此塔婆とつばめもおと、いアレアノ森の下で
侍ていの人ひとがむごく殺されいたゆへ村の者ものがあそこへう
づめ今お寺で回向まうこうして貰もらつて立てやらふと持て来たので
ござる

三人 ヨウ

錦 モウく思ひ切て跡へ引帰して泊ッて翌早く越さつしや
るがよい

△ それを聞いてわしハがたくく一寸もあるかれぬ

○ どうぞお前さん連ていつて下さり升

(六丁オ)

錦 イヤモウ所の者さへおぞげをふるふものを旅人衆ハ尤の
事だ

□ ア、たすけぶねく
ハテわしが送つて進ぜ升うサ、早くござれく

ト山おろしに成り橋懸りへ連れては入る鬨笛の入た

る合方山あがた鉦かねに成り向ふ橋藏はしざう出て来る跡吉三郎
上布のぶつき半天大小紐付も、引切わらし殿中

笠かさを持虎五郎ほつと下男したおとこの旅形りやうぎり手甲脚半三尺一
本ほんざし腰こしに小さキ水飲馬杓みづのりの根付差さ椎津藩はな中夏目
四郎左衛門と印いんせし絵符えふ付の両掛りやうがけを昇付添来り

吉三郎 こりやく若ひもの此近辺に人足ハ有まいか供の者の手
替りにいたしたいものじやが

橋藏 ヘイ不断ハ雇人やとこ足あしに出升ものもござり升るが取込時分ゆ
へ皆野へ出ており升して雇れる者ハござり升まい

(六丁ウ)

虎五郎 コレく貴様麓迄酒手さけてでかついでくれまいか
橘 どふいたし升して私ハ此頃迄鎌倉かまくらの夏目なつめさまといふおや
しきに若徒奉公わかしんいたしおり升して力ちからわさを致した事ハ

吉 コリヤく夏目の家に

橘 ヤアあなたハ大旦那様

吉 源吾げんごで有ツたかヤレく思ひがけない所で逢申た
虎 マ、向うの森下へお出被成升○ヤレマアおたがいに達者
で此程なめでたい事ハない

トせりふ言く皆くぶたいへ来り両掛をおろし吉
三郎はへ腰をかけて

吉 シテ兄の磯平いそへいもそく才でおるで有うな

橘 有がたふ存ぞん升あしかながらお聞及もござり升うが逸見ひび甚
右衛門えもんさま宝紛失たからごぼより御ちつきよにて兄磯平も昼夜身を
粉こなに

(七丁オ)

くだきおり升れど今以てその有家が
サアそれゆへに大旦那さまはるくくと此越後へ御下り
でござるわいの

某^{それかしこも}連も一ツ家の甚右衛門心ならず老職方へ願ひを立罷^{まかり}
下りしが其方も存の通り手前が家に重代の黄金^{かうごん}の像も今
以て

(貼紙)「像も父上御切腹の砌紛失なし今以て」

行衛しれずもしや八国元トへ紛れ参^{まき}つておるまいとも申
されず尊像^{そんざん}詮義二ツにハ甚右衛門があんぴまつた国ゑん
なせし悴四郎三郎が行衛も尋ねんと道中ひつそに下り参
つた

それハはや御心配甚右衛門さまも嘸およろこびでござり
升う少しも早う御供いたして

ア、イヤくお忍^{しの}びの御下りゆへ直に御城^{じょうか}下へお出も
いなもの

某^{それかし}ハ一トまづ八彦の町チへ旅宿を取明朝改めて家老中へ
着届^{つけ}ケをいたそふと存か其方大義ながら甚右衛門へ此由
を伝へておくりやれ

(七丁ウ)

橋 畏^{かしまひ}り升たさやふなら私ハ西坂よりいづも崎^{さき}へしかし旦那
さまあなた海道をお下りハよろしうござり升るが此節ハ
山賊^{そく}が出升して甚ぶつそうでござり升るが

吉 イヤく大事ない只今も峠の茶見せで承りしが何程の事
が有う其方ハちつとも早う

橋 左様なら氣を付て上て下され

虎 わし独り付ていれバ大ばんじやくだ

橋 左様ならバ

吉 いそいで行やれ

トいぜんの鳴物に成吉三郎虎五郎ハ上手橋蔵ハ橋
が、りへは入るしらせに付引て取後切て落ス

本舞台向奥深に一二の浪手摺遠見空下手岩の張り物陀籠今三段の
岩真中大臣柱の浪手摺しうかあほりにて抜る仕懸此

(八丁オ)

前づらへ中洲陀籠の小高キ岩滝有上の方鯉突小家能キ所に柳の
大樹浪の音時の鐘にて道具納る

ト橋が、りばたくに成りたら蔵又ハ福蔵高吉乃六
しうかの世話娘を引立出て舞台へ引すへ

とら蔵 なんでもいふ目が出るとハけふの事だ

又八 小路伴内殿がひつぱらツてくれるといふハ此あまに違い
ねへ

福蔵 美鳥といふハおぬしが事で有う

乃六 これく何もこわい事ハねへ

高吉 い、所へつれていくのだ

五人 早くあゆめく

しうか ア、モシくそりや人違へでござり升う私ハさやふな名
でハござり升ぬどふぞおゆるし被成て下り升

とら これわしたり連ていつて生キ肝でもとられるのだと思ツ
ているそういふ

(八丁ウ)

四人 訳でハねへなんにしる伝蔵ハ元トから此子に心安いといふから早くきて落付せてくれ、バイ、に何をしたいヤアがるか

宗兵へ ト浪の音上手今宗兵衛うるく出て来り どうしたくつらめへたか

五人 丁度い、所で出ツくわした コレ美鳥久しぶりだおぬしも達者で○ヤア違ツたくこれじヤアねへ

とら どふりでおかしなあんべへだと思ツたしかし此俵おつばなすもおもしろいものだ

宗 まてくお初穂ハおれだ

福乃高 そうハ成らねへく アレアレく

ト捨ぜりふにて皆くのつか、る此内橋が、り今吉 三郎とら五郎出て来り此体を見て

(九丁オ) 吉三郎 年シ端も行ぬ小娘を憎ツくきやつばら

宗 ト福蔵高吉を投ケ退ケしうかをかこひ急度成 なんだくく此二本棒め抑きメろ

ト早き禅の勤に成り吉三郎おどしに刀を抜切立る是にて皆く捨ぜりふにて上手へ逃では入るしうかうつむき泣て居る合方

虎五郎 にくひやつら旦那さま皆逃て仕舞升した

吉 只今噂有ツた盗賊と申ハきやつらが事じやな手前ハまたどれ程の手ごわい者共かと存たに成程針程の事を棒程に

虎 噂する物じやなア 左様でござり升盗賊のてうぼんが大ぜい手下をしたがへてあるくと申升したゆへ私ハ有様ハ気味がわるふござり

升 どなたさまかハ存升ぬがよい所へおとふりあわせ下さり升てのがれがたないさいなんをあなたのおかげでアイ

しう タ、タ、ト癩のいたむこなし

吉 こりやくいかゞいたした女といふものハ心の細い物じやはつと思ひ癩気が

(九丁ウ) さし込んだと見ゆる

虎 ヲ、かわいそうに旦那様何ぞお薬りハござり升ぬか

吉 こりやくそこらに清水が有う汲んで参れ

虎 かしこまり升た ト虎五郎腰の水のみを取上手へ汲に行吉三郎印籠の薬を出ししうかにくませ介抱する虎五郎水をのませる

しう ア、どういたした事やら ト口へ指さして物のいわれぬといふこなし有て地の砂をならし指にて書吉三郎よミ下し

吉 なんじやものがい、とふても癩がいたんでお礼さへ申されぬ○ヲ、そふ有うく ○ ト又書

か、さまの病気ゆへ医者を呼にゆく道にて今の盗賊に出合どう成事と思ひ升所へお出なされてあまの命を助り嬉

しいと思ふと

(十丁オ)

ついに覚へぬ此くるしみ○ヲ、尤しごく 卜又書

虎 何くわたくしが在所ハ此ツイ川向うでござり升るが母
さまの病氣わたくしが手一ツのかん病にござり升るがさ
ぞ待久しう思うておられ升うなれど

吉 此ていにてハ一ト足もあるかれ升ぬ程に何卒お情と思召
れ此由を母へおことづてをお頼ミ申上る○

トよミ仕舞

虎 ハテ扱不便な親一人り子一人りにて医者を呼に行し道に
て盗賊にとらへられ癩にてなやみながらも母の病苦をあ
んじる孝心

虎 ヤレくかわいそうにどうぞ仕よふハござり升まいかな
ア

吉 此俥に見捨て参らバ又只今の盗賊共がとつてかへしかれ
を手込にするハひつぜう

虎 親ひとり子ひとりとあれバしらせてやつたれバ迎むかい
に来る人手もござり升まいいつそ私がおぶつてやり升う
か

吉 成程それもばつくんの功德くどくじやおぶつて遣せ

(十丁ウ)

虎 ア、旦那様おぶうハよふござり升が此両掛をどういたし
升う

吉 何さまそれに当惑とうわくいたす

虎 かるいものならあなたにお頼ミもなり升れどお刀やお金
がは入て大そうな貫目ゆへ

吉

イヤくかやういたそかゝる孝行成ものを助るに誰も笑

虎 ふものも有まい程に予が此女子をおぶつて遣わそふ
それハマアよい後生でござり升るもはや日暮で人どぶり
もござり升ねバ

ト此内しうか吉三郎の袖を引又地へかく

吉 何くお助被成たその上にあまりもつたない○何の
くくるしうない日暮ぬ内早うく○こりや其方ハ瀬ぶ
ミをいたせ

かしこまり升た○

ト虎五郎両掛をかつぎ浪手摺を渡る月出る

ヨウ聞たよりハ広い川でござり升なア

ト浪の音上手へよき程に足をかく是にて虎五郎沈む

吉三郎

(十一丁オ)

吉 しうかを背追い捨ぜりふにて虎五郎の跡をあゆミ
あぶないぞしつかと取付ておれ思ふたよりハ荒瀬じや南
無三雲隠れじやなア

ト合方止む是にてしうか合口を抜キ由断を見すまし

吉 三郎のあばらを突込ハアトいふて兩人落入り又
二の刀を突立是にて水中へ落入る水煙り立昇るし

うか浪間を潜り件の中洲へ這上り急度見得本釣鐘
誂の合方橋かゝり分二役磯平にて吉三郎旅形奴一

本さし笠をかざし伺ふ上手鮭突小家分友右衛門

黒羽二重百日大小にて出て何うしうかかゝへたる

吉三郎の大小を舞台前へ持出て白刃の寸を取見る

事有ツてしうかへ双方々さぐり立廻りほぐれて急
度見得是分滝の鳴物かわつて空友右衛門真中へ入
れわり吉三郎へ刀を抜足を払うを木のかしらしう
か上手に浪の音兩人見込仕組ひやうし幕

(十一丁ウ〜十三丁オ白紙)
(十三丁ウ)

嘉永四亥歳菊月大吉日

紙数 拾壹葉

千穂萬歳

大々叶

本主 松嶋松作

(十四丁オ中扉)

当ル亥の

秋狂言

新板 越白浪

第二番目中満久

新潟町道場ノ場

寺泊本陣ノ場

しうか
花友

団十郎

高麗蔵

文五郎

翫太郎

又八

虎蔵

吉三郎

勘弥

ふく蔵

岡六

大和平

高吉

かん介

乃六

成蔵

宗兵衛

友右衛門

(十四丁ウ白紙)
(十五丁オ)

本舞台三間の間一面の平ぶたい上手折廻し障子建切真中暖簾口上
手へ寄せて床の間八彦明神画像の軸を懸机に供物を備エ下の方赤
壁刀掛へ面小手鞆二三本掛ケいつもの所門口柱に美塵流劔法指南
美塵のお松といふ懸札門口外壺間の腰障子三条長岡上下船宿ト筆
太に印せし隣家の体上手に文五郎庄屋の拵にて針箱の上へ義太夫
本を乗せ阿波の鳴戸の上るりを語りて居る側に翫太郎下男の拵に
て福蔵の百姓を相手に鞆打をして居る見得太鼓入おけさぶしにて
宜敷幕明

翫太郎 それそこを打込んで来た〜ヨウ〜

福蔵 そうハゆかぬヨウ〜

文五郎 刀の詮義濟迄ハ夫トの命助けてたべ○

トむちうに成ツて語ツて居る翫太郎こなし有ツてそ
つと文五郎のうしろへ廻り首をおさへる

(十五丁ウ)

コレ九助じやうだんするな是からかんじんの所じやい

どこの国にか劔術の稽古所へ来て義太夫を語るといふが
あるものかな

なぜい内で浚うとか、がごとをぬかすゆへ爰の稽古所

へきて語るのじや劔術じやといつて義太夫じやといつて
稽古するあじハ同じ事じや

イヤあて事もねへそんならおまへもチツト爰へ来てつか

て見なせへおれが代稽古してやろう

べら坊めなま兵法大疵の元トだ

翫

文

文

福 イヤ／＼宿老さまのお詞だがそれハ違ッた爰の師匠殿

におそわつたら大ばんじやくだ

翫 女でこそあれミぢん流の達人 則 名前もミぢんのお松と人も知ツたる先生だそれに引かへおまへなぞがその声で義太夫とハあつかましい

文 べらぼうづらめいつ迄此声でいるものかそれにハ薬りと
いふ物が有ツて段／＼とい、声になるわへ

(十六丁オ)

福 ハア声のよくなる薬りがあり升かな

文 則高金を出してもとめたおらんだから渡ツたこりやずほう湯といふ薬だハ

翫 そのずほう湯もたんとのであんまり声が能成り過たら
また義太夫にハわるからうね

文 ハテそれから義太夫をやめて常磐津としようしをかへ太夫に成るつもりじや

福 常磐津の太夫に成つておまへの名ハなんとさつしやる

文 ハテ知れた事常磐津文五郎

翫 エ、何をおつしやるそれハよいがおまへハ上るりより首を大そふ振るがしまいにハ首をふり切るでござろふ

文 ナニ此首が切れてたまるものかどろ坊でもしやしましい
イヤどろぼうといへバ此節自来也といふ大どろぼうが此

福 国へはいくわいするから召捕れとおふれじやぞや
文 サア則今隣り町から廻ツて来た人相書こいつハ兎角刀

が好と見へて方／＼の

(十七丁ウ)

屋敷へは入又方／＼へおどり込んでちいさな尊像をめぐ

けるといふ事じやト懐中今人相書を出ス

翫 ハアこれかない、男だ先頃も高田のおミどうへは入ツた
との事其事も此人相書に出てあるだろうね

文 ナント書て有るかおれが知るものか

翫 へ、それが一ツよめなくて宿老も気がつゑ、
何が気が強いわがが世話で勤ていしましうつちやつ

ておけい

翫 イ、やうつちやつてハ置れぬへそんな大事のふれが廻れ

文 バ心得の為に宿老がふれてあるかなくツちやあどんなめ
におふもしれねへとうへんぼくめ

福 是ハしたりわけもない事を

文 此びたつつらめとうへんぼくといやあがつたな

翫 いったがどふしたどんぐりまなこめ

(十八丁オ)

文 モウ丁簡が

トつかみ合に成りあたりの鞆をとつて打合文五郎跡

翫 じさりする翫太郎あやまつて八彦明神の画像を破
る心付づ打合福蔵留る此内橋懸りより又八出て来

り門口を明ケ

福 又八 みぢん先生お宿かなハ、アお稽古か御せいが出る○

ト向ふ見へぬゆへうろ／＼と此中へは入兩人むちう
に成ツて又八を打すへる此時又いぜんの密書を落

ス

アイタ、、、なんだ／＼

福 ヲ、おまへハきのふ弟子入したお侍だ

文 ヲ、ほんにいつの間にふつて来たか

翫 人の降りそうな天気でもないが

文 誠に是ハ間違と申もの

(十八丁ウ)

翫 どふぞ御了簡被成て下さり升せ

又 イヤ／＼ 鍛術修行のものにハ俣ある事でござるシテお

松殿にハ

文 寺参りに行れたゆへ私共が留守居致しており升る

翫 モウ程なく帰り升ふからそれ迄私共をお相手にお立合被

成升

又 イヤ／＼ 今のでこり／＼ 致した有やうハ鍛術の弟子入り

にかこつけ爰の内へ入り込んだハ評判のみぢんのお松ど

のいかに此新潟が後家がはやれば、逆鍛術の師匠迄が後家

を立る事も有まいと去る人にたのまれよい縁談の口が有

ゆへ門弟になつて世話を致そうとぞんじて

ト此内翫太郎茶を汲出

翫 それハ大きにお世話お茶でもお上り被成升せ

文 爰の師匠どのハ後家でハないとこの事どこにかれつきとし

た御亭主があるゆへアノ様に今年二ツに成子供がござり

升

又 それハ大きにふみぞこないを致したしかしこちらの口も

おいしい所

(十九丁オ)

故先きの亭主の方が片付ならどふか相談を致したいもので

ござる

文 何も御縁づく咄してごろうじ升

又 しかし手前もほうゆうと約束致した事がござれば又出直

して

是ハお早う／＼

又 おいとまいたす

文 おと、いお出被成升

トいぜんの鳴物に成り又八状を落した俣橋懸りへは

入る

福 ヤレ／＼ アノべら坊めが来たので喧嘩がどつかへ宿がへ

をしてしまつた

翫 今更まき直しにも成るまひ

文 一ツメてくりやう

三人 ヤヨイ／＼

ト向ふかかん介風呂敷を背追ひ足早に出て直にぶた

いへ来り内へは入て

(十九丁ウ)

かん介 なんだ／＼ 四九郎さんむちうに成ツてコレサ○今おかミ

さんがそこへ帰ツてお出なさるから先きへしらせに来た

のだ

ナニ師匠さんが帰ツてござつたか

かん 四九郎さんにも九助さんにも留守を頼んで置てお気の毒

だから手まへハ早く先きへいつて御酒をあげてくれると

いゝなすつたぜ

文 それハありがたい有様ハけふハこちのちつさが誕生日

だから御馳走をメよふと相詰めおつたのじや

ト翫太郎掛物を見て

翫 ヨウ大へんく師匠がしんくをする八彦明神の御影を
こんなに破ツた

文 ヲ、くくくおいらじやないく

翫 どつこいそうはいわさぬさつきおれをぶとうとして今の
二本棒をなぐつた時やつ付たのだ

文 イヤくおぬしが鞆をこう出したゆへ突破ツたのだ

(二十丁オ)

かん 是サくあらそう事ハねへうらうちをすりやアい、じや
アねへか

翫 おぬしハいつもきたな細工をするから一寸うらうちをし
てくれぬか

福 サアく爰にのりがござる

文 までく爰に何やら手紙のよふな

かん 反古でもなんでもい、よこしたく

ト又八が落したる書物をうらよりうとうとしてみえ
いをまた破る

文 ヲ、とうく皆破ツてしまつたたおしものめ

かん こいつハ大へんい、事がある新ン町の経師屋へもつてい
つてすつかり直してもらわう

翫 師匠のかへらぬうち早くく
がつてんだ

文 ト件の書物にてうらを打懸た俣持て橋懸りへは入る
扱それハよいが師匠が帰ツて来て床の間にお御影がなけ

れバ

(二十丁ウ)

気にかけてよふア、なんぞかわりに○ヲ、あるく丁度似
寄りの此人相書これを札箱へ入れてよしく

翫 こりやアい、思ひ付たその内本ものが来てくる

ト文五郎手早く人相書を机への上へ立かけ

文 妙くドレもう一段

翫 こつちも一トせい

福 又おたのミ申升うか

文 さらバおんせいをしらべ升ふか

トいぜんの本を出し語りか、る翫太郎福蔵鞆打に

か、る向ふ成蔵序幕の形り笛を腰にさし職をか

つぎ出て来る跡よりしうか稽古師匠の拵へ抱子を

抱て出て来り

しうか そこへござんすハお隣りの浪蔵さんでハござり升んか

成蔵 ヲ、お松さんどこへお出被成升した

(二十一丁オ)

しう ハイけふハ坊主が誕生日ゆへ白山さまへお参りにいて参
じ升た

成 道理こそけさ赤のめしを下されたいつもながら貰ふてば

つかり一人りものハやくたいでござり升ぬわいの

外の稽古と違ふて若イ衆がさわぎ立るので嘸おやかまし

うござり升う

成 イヤくわしらが内へもわかいものがよつて毎晩の笛や

ら鉦やら太鼓やらでそうくしいこととござり升う

しう イエモ此ふる町ハかどなミの事何ハともあれ早ういて
成 おまへも休まんせ○ヨウわしハ向うの見せへきせせるを
忘れて来たなくならぬ内ちよつと取ツてき升う

しう 早ふいてござんせいなア

ト成蔵ハ引返シしうか舞台へ来る此時出合がしらに
かん助橋が、りより出て

(二十二丁ウ)

かん助 今おかへりなすつたか

しう わが身ハどこへまわつて帰りやつた又道よりをしおつた
な

かん エナニ経師○ナニちよいと帰へツて今酒をそういつて来
升たのサ

文 ヨウ師匠お帰りか此頃うちの雨で一チの町ウの方ハ道が
わるかつたでござんせうの

しう ツイツま先キをよごし升した
福 サアあしをすゝいであげ升ふ

しう これハはゞかり
翫 マア坊さまをこつちへお出し被成升

ト抱子をとる此内福蔵ハしうかのあしを洗ッてしま
ふ

かん サアおれにもあらつておくれ
福 エ、ふざけるなへ ト抑く

かん アイタゝゝゝ、足をぶちやアがつたな
(二十二丁オ)

翫 コレゝゝ足の事でそのがきとけんくわハよしたりゝ

文 サアゝ待兼たゝゝモウすこし早くかへらつしやると阿
波の十郎兵衛召捕りの段を聞かせたものを

しう それハ残り多い事でござり升たなア○

ト足をふきしまひ上手へ来る盥ハ此俣舞台へ置
お宿老さんを始め皆さんにも留守をお頼ミ申モウゝ早
う帰ろふと思ふても道ゝ御不沙汰のいゝわけや義理を

つとめたゆへしかし是で気が済んだわいなア
気の済ぬのハおれ計りモウ盆もとふに過たのにいまだ
に宿入にやつてハくれず

かん ヲ、おれも其事をこいつがお袋にたのまれたつけおやじ
の寺参りもさせたし又此頃わるい噂もあるから一ト晩泊
りの暇を貰うて一としめメなくつてハ成らぬといゝ升た
つけ

翫

(二十二丁ウ)

福 奴できかずハこんどハ坊主にしてやるがよい
ほんに丁度けふハ此雅之介がいわひじやによつて九助さ
んと一所に宿入りにいつたがよいぞや

しう そんなら一ト晩泊りにうれしいなゝゝ
かん そんなら一ト晩泊りにうれしいなゝゝ

文 わしも大きに義太夫を語り過したドレおいとまと仕るふ
か

しう アレマいつもとハ違うて節角の心祝ひおいしうハ有まい
が

文 なんのゝ有よふハそういわれるのをまつていたのだ
翫 そんなら奥で此顔で

福 わしらもおしやくながら

かん そばから肴をつまみぐひ
文 ドレ御ちそうに成り升うか

ト文五郎先きに此人数奥へは入るしうか抱子をいぶ
りながらこなしあつて

(二十三丁オ)

しう ヤレくけふハ思ふたよりくたぶれ升したしかし此子が
誕生日神参りした心ハやいとすへたと同じやう○

ト抱子を見て合方に成り

これに付ても四郎三郎さま鎌倉でなれそめ親子の難義そ
こくくにいとまごひさへなき別れ其跡で産落しお跡をし
たつて此国へ下ツて聞バ紛失の宝詮義に国遠なされそこ
よこよと尋る内も藝ハ此身のふし合せ女子だてらに劍
術の指南も実ハ表向キ○

ト側にある鳴戸の上るり本を取りあげ

此上るりの銀十郎も果ハやいばに非業のけいざい苦勞苦
患も夫トの為どふせおわりハ此本のおツ、け我身も○

ト此時抱子泣立るをゆすぶり

ドレ添乳して寝さし升ふか

トしんみりして唄に成り抱子を上の方へ小蒲団を敷
枕を

(二十三丁ウ)

させ横に成ツて添乳する此時向うかいぜんの成蔵
先きに団十郎深網笠大小浪人目やミの拵へにて成
蔵の持し笛を持そへ出て来り

団十郎 是ハどなたかハ存升せぬが思ひがけなひ御厄介に成升て

成蔵 ござり升る
なんのくわしハツイ向うの内でも戻り道ゆへ連れて来て
しんぜ升した御らうじろ人にはどふらくといふ事が有ツ
て笛やわさんがすきゆへ又晩に友達をよせておんせいを
はつしるつもりじやおまへもうたいをうたわつしやるが
たのしみな事でござんせう○それく道がわるいぞや

団 おかげさまで助り升た昼の内ハかすかに見へ升るがもは
や夕方からハ少しもわかり升ぬしかし是からハモウ往還
ンでござり升るからそろくど参られ升ふ

成 随分氣を付てござらつしやい

(二十四丁オ)

団 有がたふござり升ヤレく不自由な事でござらふ○

ト成蔵ハ足早に下手の内へは入る団十郎何ひく門

口へ立

吾妻遊びのかづくにその名もつきぬいろ人の○
ト謡有て

長く浪人にこれんミンを御願ひ申升る

トしうか聞付

しう どれく手の内をあげ升う待つて下されや

ト門口へ行ながら巾着を錢を出してやる団十郎是を

取て

団 ありがたふござり升るエ、是からのつたりへいまだ余程
ござり升るかな

しう かれこれ半道もござんせうがどふやらお目がわるいやうな

団 ハイ俄目くらで道はかゝ参升ぬ

ト此内しうか思ひ入有ツて

しう どふやらものごし形り格向心の迷ひか

トいぜんの盥の水鏡へ目を付

団 イヤまよハぬ内に トいふをしうか急度見込

(二十四丁ウ)

しう ヤアおまへハ尋る四郎三郎様じやござり升ぬか

団 そうしう女中の声ハ慥に

しう 鎌倉にておわかれ申たわたりしやお松でござり升る

団 エ、どうして爰へ

しう よふマア御無事で

団 いやつたのう

しう マアくこちへは入りなさんせ ト合方

団 いでも大事ないか

しう なんのマア爰ハわたしが内でござんすもの○

ト団十郎網を取しうか手を取真中へ連れて来て

ア、嬉しやく今も今迎おまへの事神くさまへ御願を

かけこうも利益の去りながらいつの頃よりその様に

団 サア宗近の刀尊像の詮義に昼夜油断なく心をくるしめひ

いを

(二十五丁オ)

破り昼さへかすかな此眼病それハ格別どふしてそなたハ

鎌倉を

しう サア立退た様子ハ跡でマアそれよりハおまへに見せてよ

ろこばす物がござんす○

ト上手の抱子をいだきそばへより

サア是見てくださいなア

ト渡ス団十郎さぐり見て

団 ヤコリやおさなごを

しう アイナアおわかれ申た其跡でおまへの種を産落しけうの

今迄虫気もなふ大事にそだて、めぐりあひほめらりやう

といくせのおもひ

団 や、スリや身ごもりしをぶなんに安産○ヲ、然も男じや

くお松出かしたと、が跡継キ夏目の嫡子○

ト赤子ぶへ

その苗跡の氏景図絶るも今宵明六ツの鐘をかぎりに

スリや今もつて二夕品の

団 宝ハかひくれ行衛しれずお預けの親人にハ夜明かぎりに

御切腹

(二十五丁ウ)

しう エ、

団 此身ハ元より覚期の上さすればかわいや悴にも

しう か、りやつながるあなたの御苦勞わたしもせめて二夕品

を尋ね求めておまへにと昼ハ稽古に人あつめ夜るハかわ

いや此子を肌

団 おふて何国へ

しう エ○サア神くさまへ願シかけても今に行衛が

団 しれぬハ宝しれたるハ思ひがけなひミぢんのおまつ定め

てそちハわしが事

しう わすれぬ印年たけてもまゆも落さず齒も染ず髪にハ油け

もないどうぜん啞が誠ハツイ見ても

団 しれぬめくらの垣覗きそんならおれをしんじつの

しう 男八ひとり子ひとりに後家立通すをいろくといふを手

づよふこらすゆへあれハきじんのお松じやと異名を取り
しも常く

(二十六丁オ)

団 口寄麗にハいふもの、ぼうずがひよつと口きかば

しう 又そのよふな トつめる

団 アイタ、ゝ、むかしにわからぬちからづよ

しう エ、にくらしい

団 わかい、女房

しう イ、エそりやわたしより

団 いとしいいとし子

しう 今宵ハともに

団 三人ぶところ

しう どうやら夢でハないかいなア ト赤子ぶへ渡ス

ト向ばたくに成り花友屋敷娘の拵へにて走り出て

直に内へは入りしやんとめて伺ひ居る跡今宗兵衛

伺ひ寄

宗兵衛 爰明なく

(二十六丁ウ)

花友 イヤ明ケぬわいなア

吉三郎 トまたバタくに成り吉三郎若徒磯平にて走り出て

しう うぬろうぜきもの

宗 何を二才め

ト一寸立廻りあしらい兼一ツさんに橋がかりへ逃て

は入る

吉 いけつふてへやつ○若しおじやうさま私でござり升宇佐

美磯平でござり升る

花 ほんまに磯平かや

吉 ハテモウ今のわるものめハ追逃し升してござり升る

花 それでもどふやら○ トそつと門口を明テ

吉 ヲ、磯平よふ来てたもつたのう

私が草履の鼻緒を立る間に慥かあいつハお咄しの有た小

路伴内とやらがかとふどのやつら残ず追いかへし升して

ござり升る

(二十七丁オ)

しう ア、モシ女中さんなんじややら人の内へ断りなしになれ

くしいにも程の有つたものじやわいなア

花 ハイ御めん被成て下さり升私ハ三条の者で白山へ参り升

たが只今道にて狼藉ろうぜきものに行合それゆへお内へ欠込ミ升

してやうくのがれ升したわいなア

しう サアそれでもござんせうが乳のみごがおびへ升るによつ

てなア

花 磯平我身は入ツて申訳をしてたものふ

吉 ヲ、大きに心付升なんだ○ ト内へは入り

只今申され升した通り白山参りの道に立はだかりむほふ

をはたらき升るゆへわたくしがふせいでおり升内御寮きやく

人様ハ一さんに逃てお家へかけ込れそれゆへきうなんを

助り升してござり升る

花 是と申すもお内のおかけ有りがたうぞんじ升る

吉 不礼の段ハ幾衛いくゑにも御免ごめんン被成なて下さり升シ

(二十七丁ウ)

しう 其様におつしやつてハかへつてお気の毒でござり升る

団 それ〳〵むほうもの程こわいものはござり升ぬしかしどつこもおけがござり升なんだかな

花 イエ〳〵仕合とけがもなくたゞ驚た〇

ト団十郎を見て恠り

ヤアおまへはわが夫ニ雅次郎さま

団 エ〇そりや人違いで

花 なんの間違へてよいものでござり升ふ私ハ言号の美鳥でござり升わいなアよふマア御無事でななつかしうござり升たわいなア

ト花友団十郎にすがり

吉 ヲ、そふだ若旦那モシおまへさまハ磯平が爰こゝにおるにそしらぬ顔かおハお情なさけなひ今迄とハ違うけふにせまつた親旦那のお身のうへそれゆへ美鳥様も爰の白山さまへきびしいお願かんがけ被成なお供して来た宇佐美磯平なせ見ぬ顔かおをさつしやり升おどふよくだ〳〵わいのう

(二十八丁オ)

団 そんなら某それかしが鎌倉離りきん参まゐんの跡にて

吉 おじやうさまハお跡をしたい儘ままに雅次郎様ハお本国へござつたに相違ちがないと下郎げらうめを道案内みちあんないにお下り被成なれ其跡あとより名越なごさまにもお国話こくわの心こゝろ苦くる万ま苦くるもあなたに逢あたさにそれがしどて某それがしどて逆さかもそなたの事

吉 ヤレマア是で先ツ一ツ方ハ重荷おもひをおろしたといふものだトしうかこれを聞あきれたるこなし思入しよ有あて衣紋えもんを造つくり真中まなかへわつてしやんとすわり

しう コレ女中さんイヤ女中人違ちがひするにも事ことによる譬たとハ雅次郎さん共いわしやんせうが此お方ハ夏目四郎三郎様といふて鎌倉かまくらに居ゐる時から二世かけて約束やくそくしたわたしが男苦おとこくる勞苦ろうくる患うれんでやう〳〵と尋たづね当あつた大事だいじの夫ツトを我妻わがつまとハなれ〳〵しいモウ〳〵わたしの内にハ置れぬ

(二十八丁ウ)

吉 きり〳〵出ていつて下されエ、モウ(抹消)「折升おしさんも行いなさんせいなア」折助おしすけさんも行いしやんせいなア折助おしすけとは御挨拶ごあいさつだ

花 フムそんならおまへハ

団 サア鎌倉にてせん〳〵よりふとした事にて

吉 ヲ、そうだいつぞや芝居へお迎むかひにいたつ時ほんにその通とほり

花 噂うわさに聞きたお松さんとやらハおまへでござんしたかそのお方かたとよふマア爰こゝで〇そりやあんまりじや〳〵わいなア

ト寄り添よふ

しう ア、これ〳〵大事だいじの男おとこをそのよふにもみくちやにして貰もらひ升あまいエ、そつちへのいていやしやんせいなア

ト突飛つとばス

吉 ア、コレ〳〵大事だいじの美鳥様を其様にもみくちやにして貰もらひ升あまいエ、そつちへのいていやしやんせやイ

団 マア〳〵これにはわけのある事

吉 イ、やわけもへちまもかまわねへヤイふんばりばりふん
め此国へ

(二十九丁オ)

ござれば雅次郎様此美鳥様とい、号コレだれに断ツて貰
ツたコレ猫やちんころじやねへぞ大殿さまから御免ンで
夫婦にならつしたのだ昼日中両国ぼしの上でだき付て
いても点の打てハない筈だそれを横取をしやアがりやア
うぬハ間男だじやアねへ間女だサア美鳥様のうしろにハ
此磯平が扣へ居る江戸子が喧嘩にまけてつまるものかへ
ト鉢巻をする

吉 団 コレく磯平りやうじすな迷惑いたすハ某計りじや

なんだおめへさまハいつものよふにもねへぐたくして
気でも違やアしねへか

ト此内しうか抱子を連れて来て

しう ヲホ、、、コレこつちにハな雅の介といふて今とし二
ツに成る男の子の有る身そのわたしをのけて外に女房が
あつてよいものかいなア

花 エ、そんならそのお子ハ我妻のお種でござんしたか

(二十九丁ウ)

吉 モシこんなものをいつの間にこしらへなすつたへ

団 サア思ひがけなくもふけた悴

しう なんとこれでハ

花 モウ此うへハ ト自害せうとする

吉 ヤアめつぽふな早まつた事

団 コレ短気を出しては兄御へ身共が

花 そんなら添うて下さり升るか (ここに台形)

団 そわいで成ふか親くの

しう モシそれでハわたしへ偽りいふて

団 そふでハなけれど

花 わたしハとふから

しう こつちがせんやく

吉 せんやくでも粉薬でもモウ此病気にや利ぬぞくく

(三十丁オ)

団 是ハしたりその方迄がそのよふに

しう 人の内へ欠込でむりばかりいわしやんすところふしてやる

ぞへ

団 トしころの合方に成り床に鋳り有る膳碗をほふる

ア、コレく悴があぶなひこつちへおこせ

吉 サアおまへ様もじつとしていちやア外間ンがわるいそれ

此たらいを

ト下手の盥を取て来る

花 こりや水がは入ツているわいのふ

吉 エ、いくちのないこふ明けてほふるのだ

花 大事ないや

団 是ハしたり籠が刎ねてハならぬ

しう エ、モウこふするわいなア ト絵姿を投る

花 こふするわいなア トやうくたらいを下へ打付る

吉 エ、力がないからあまく見られ升ハこふ被成升

(三十丁ウ)

トした、かに打付る是にて籬刎だらくとこわれる

此音を聞付奥合文五郎翫太郎走り出て

文五郎 ア、まんざいらくくくくく

翫太郎 くはばらくくくく

兩人 世直しじゃく

ト大きくいふこれにて双方^{そふはふ}恟りして跡へより見て居る

文 へ、町内のおさもいたすもの、思ひ付どんなものじやい

翫 たちまち喧嘩^{けんか}ハ立去^{たちさ}つてしまつた

しう イエ立去り升ぬやつぱりそこにおり升るわいなア

文 ナニそこにおる○ヲ、此むさくろしい浪人かサアく出

て行ケく

しう ア、コレそのお方ハ大事の人モシマア聞て下さり升○

ト詔の合方

常くおはなし申たこちの人が見へ升してね

文 どこにく

(三十二丁オ)

団 則私でござり升る以後ハお見知り置れ下され升ふ

文 是ハくお見それ申升た私ハ生れ付いてうわ目計りつか

つており升からツイ見落し升してござり升る

しう マア聞て下さり升その所へ又候アノ女子が女房じやと申升

して参升たゆへはらが立てく

文 サ、皆迄のたもふなイヤコリヤ至極尤じやわいのふ

団 イヤ申あなたハ御町内のおさも成る、お方の様に承り升

したがどうぞ此場の納り升る様にお願ひ申升

文 是ハく御挨拶しかながら私支配の内に女房をふたり

持たる男の有るのもいわばわしが外聞ンと申ものお手柄
くな事でござり升

ト是をきく吉三郎むつとして翫太郎を連れて下手へ
来り

吉

モシくおまへハ一寸見た所が鼻ハひくいが先ツ町内で
人の世話でもやきそふなお方と見かけて申升、爰にござ
るのハアノ雅次郎さまの言号の

(三十二丁ウ)

女房そこへわたりも付ないでどこの国にか先キへ子をこ
しらへるといふがござり升ふかさつちの娘御ハお雑煮ハ
すきだがちつともやきもちをやく事が出来ねへせうぶん
それゆへわたしが無理でござるか

翫

イヤくこりやおまへの方が至極御尤じや

しう

アレ見やしやんせあちにハかせいがふへたわいなア
それじやといふてわたしや親くからの言号じやわいな
アモシそれでハむりかいなア

ト文五郎につ、かる

文

サ、尤だといふに

団

サ、そふでハ有ふがそこを預ツかつて下さらぬと手前が
致方がござらぬ

文

サ、そこも尤

翫

なんでも年端も行ぬ娘御が恥かしいを捨ていふのを四九
郎さんにハわからねへのか
それだから尤だといふに

(三十二丁オ)

しょう それでもわたしや子中なしたる程の事わたしのいふのが

むりかいなア

どふしてサ尤だといふに

文 ハア此四九郎めごまをすりやアがつてあつちもこちも尤

だとぬかしやアがるなせ五人が五人尤だエ

文 ハテ尤が五ツそろいて居るから御尤じやわいやい

しょう イエく其様な事いふてハならぬ

四人 わたしかなアくおれかく

文 ア、癩がさし込だが トわざと目をとし倒れる

団 や、四九郎殿が何とぞいたされたか

吉 なんだ癩がさし込だか

翫 たいへんく四九郎どのヤイ

しょう なんぞ薬りハないかいなア

翫 おツトさつき見て置た

(三十二丁ウ)

ト上手の針箱はりの引出しよりいせんせんの薬包を出し手早く

のませしょうか湯を吞せる文五郎心付たる仕形する

団 どぶじやな心が付たか

吉 だいぶ首びをふるでハなひか

翫 何こりやア義太夫の語りくせでござり升

文 ヘエン天道もお恵めぐみ有ツて国次の刀詮せん義すむ迄の

翫 コレ目を廻して氣付を呑したに上るりをかたるやつが有

る者か

文 べら坊め氣付ならかたりハせぬがありやアつぽふとうだ

わへ

吉 サア仲人の氣がついたらやきもち喧嘩けんかのまき直しだぞ

(台形)

団 是ハしたり磯平どういたしたものだ

花 けがでも有てハならぬわいのふ

しょう 是迄かんなんしてどのよふな事が有ツても

翫(台形) 風浪のい、ほうへかせいをするぞ

(三十三丁オ)

文 そんなら又はじめからいよくなら又癩がフムく

翫 ア、コレく情ないモウ喧嘩ハあづかるふ

文 そんなら又上るりをかたるふか

団 モシくどふかあなたあなたの御才覚で

吉 何才覚が有るものか

文 さいかくハないがうにこうる計りじやまずわしが了簡で

ハどちらをどうともいわれぬゆへ亭主ていしゆを一日がわりにし

てそふする時にハ両方共てかけといふでもなくおちこち

なしその行のハ雅次郎どの計りつとめるよい様に勤るのが中済

でハ有まいか

翫 イヤさすがハ四九郎一生の知恵

団 そんならふたりハ

しょう 美鳥さんさへ了簡をさんすりや

花 わたしじや迎なんのいなやが

吉 そうおつしやつて下されバ三方四方納ると申もの

文 善ぜんハいそげじやわつさりメて双方そうほう機嫌きげんも

ミなく ヨイくくくく

トミな〜手を打

団 是ハどなたも段〜と有難ありがたふふぞんじ升

しう わたしらが事から皆さんのおやつかい

翫 お長家内でハ有りうちの事でござるて

文 わしハ仲人なかうどちやんぼんにはり升た

ト此内翫竹福蔵出て来り

翫竹 九助さんもふいかうじやアないか

翫 ほんに待どう

文 どれそろ〜と開しき升ふか〇

吉 マアおしづかに

福蔵 わたしらもそこら迄

(三十四丁オ)

翫太 道行と出かけやうか

団 チト又どふぞおはなしに

文 その内ゆつくり

吉 してから皆さま〇

翫 ふたりのお内義今宵ハ定めし

福かん エ、

文 わづらわねバよいがなア

ト唄に成り文五郎先きに皆〜付て向ふへは入る吉

三郎跡見送りせつこんだるこなしにて

吉 若旦那おまへ様今迄どこを尋ね廻ッてござったか親旦那

の様子御存かはしらねへがニ夕品の日延も翌の明六ツ限

り寺泊りの本陣にて切腹さつしやらねバ成らぬ手詰夫故

美鳥さま八元より兄御長兵衛様もさわぎ立此新潟の白山

様へ御嬢さまハ耽参りなかく〜うかく〜して

(三十四丁ウ)

団 ござる所じやござり升まいがや

サ、松山の乳母が所にてその様子を聞たゆへこよひ夜船

で寺泊りへ越エ今百日の日延を願ひ叶はぬ時ハ親人にか

わつて其場を去らず

しう花

団 エ イヤサ命を的に親人をすくう所存

今又是へくる道の狼藉ものに気のぼせて跡や先キなる詞

のはしにわが身がなくて叶わざる文宣王の尊像そんざうしかも正

直覚へあらバ見聞せよと突付見せたは見覚あるあなたの

様な四郎太夫さま御所持の靈像何ゆへそなたが手にある

と糺す間もなふ手込にして是をそつちへやる程に女房ぼうにな

れとむたいの有るぜうやう〜振り切来るハ来たれど

ヤ、スリヤ何と申その者共か尊像を

よろしうござり升まだ間もない事なれば新潟中を欠廻り

ひとつとらへて

(三十五丁オ)

詮義せんぎをとげしかし名越様にも本町へお出とあれバあなた

にかきたつる様に思へども身み俣まにならぬ此眼病かんばんやう

とかふいふ間もささんじの手おくれ

吉 モシ待たしやんせわたしも一所に

しう どふして女御のおまへの手に

花 イ、ヤ男も及ぬ力強

団

吉 そんならともぐ

しう 勝手覚えし裏伝ひ

吉 こりや怪我せぬよふに

しう アイ○モシどふぞアノ子を頼ミ升

花 がてんでござんす

(三十五丁ウ)

団 道を別れて

花 少しも早ふ

吉 そうだ

ト早い唄吉三郎ハ花道しうかハ橋が、りへ花友こな

し有ツて

花 男増さりのお松さん離氣の角ノもどこへやらそれも夫ト

が大切ゆへ

ト赤子泣立る

団 其坊主めが目を覚しおつたア、折わるい

花 イエく乳ハ出ずともはだ付て○

ト抱上る是にて泣止ム

それだまつたわいなアテモマア鼻の高い種ハあらそわれ

ぬものじやなア

団 ア、世が世の時で有ふなら誕生日のいわひにも

花 ほんにけふが誕生日でござんしたか道理であそこにくうぶ

すなの画像が鋳ツて○イヤ待なさんせ○

ト行灯を持心得ぬ思入にて取て来り

(三十六丁オ)

盗賊の張本尾形自来也人相書

団 ナニうぶすなの御影でなく劔に心かくるとある自来也が

人相書ハ、ア扱ハお松も某が身にか、りし劔ゆへ其自来也

の絵姿かざり劔の有所をしらん為一日も早く召捕る、様神

仏へきせいをかけしと覚へたりシテそのもの、めんていハ

色白くして鼻筋通り眼中す、しくやせがたち左りのまな

じりに一ツのほくろ

トよミ下シ

団 ハテやさかたな其面ン体左りのまじりにほくろ有とハ○

ハテナ

トいぜんの合方に成り橋が、り分とら蔵女郎屋の手

代の拵へばつち尻はしよりにて跡分四ツ手かごい

ぜんの高吉乃六頬冠りにて担て出る

とら蔵 アイモシ啓伯さんカノ稽古所へ来升したよ

ト垂を上る中分翫右衛門茶湯師の拵へにて

(三十六丁ウ)

翫右衛門 ヲ、めつぼう早かつた駕の衆御くるふだ

とら ハイ御免なさいお松さんハこなたでござり升な

花 ハイ左様にござり升ス

翫 御免被下此間ハ御目にか、り升せん

団 ア、イヤお松の宅ハ是でござり升が只今急な用向がござ

ツてチト戻るにハ間がごり升ふ言置てよい事なら私へ仰

置れ升

翫 才兵衛さんおまへの御用から

とら 左様なら御免なさい升エ、おまへさんにハお初にお目

にか、り升が私ハいづも崎の角屋と申女郎屋でござり升
が先達てお松さんが急に相談したい奉公人が有るから金

子をもつて来てくれとお手紙でござり升たが何分此節ハ
 どの坊さわぎで此近辺きまへんハぶつそうゆへ参りかねており
 升たがどふか奉公人を御相談ごうたん致したいものでござり升が
 それハはやあいにくな事でござつたいづれ此新濁にいかにたに御止
 宿でござらふから

(三十七丁オ)

戻り次第に御挨拶あいさつ致升るでござり升ふ

扱愚老ハ空日亭啓伯与申茶の湯指南しんなんの者でござるが、
 るへんどの事なればわづかな弟子計りあてにいたしてハ
 不風流なれど今日にこまり升から内職に小道具を売買
 いたし升それゆへ是の小方どのかとふから文宣王の黄金の
 像がモシ売物にでも出たらさつそくにしらせてくれいと
 度〳〵の頼ミしかし咄しに聞た事もござらぬまれな代口
 物今の先キ松山の仲間にて手に入り升たゆへ駕にのつて
 持参致升たがお松どのがおるすとハこりやいそぎぞんを
 いたし升したわへ

ア、イヤそりや小方がお頼み申た文宣王のこがねの像を
 それへ御持参被成升たな

イヤついに手がけぬ品ゆへ文錢だかじゃミせんだか存ぜ
 ぬがなんでも生のよい金むくでござるが日本で出来た物
 ではござらぬ

団 ドレ一寸拜見〇と申た所が此眼病

(三十七丁ウ)

花 夏目のお家に御持の尊像ハ私がよく見覚へて

翫 イヤ〳〵夏目もお入用なら宅にいかい事ござり升先ッ尊

像を御覧ごらんン被成い

トいぜんの像ぞうを花友に渡ス

花 ヲ、うたがいもなきふんじつの

とら

団 エ

スリヤ養父よふふのおめいと成たる尊像そんざう
 モシ〳〵そんならその代物ハ盗どろぼうものといふ様な事でござ
 り升かヲ、こわや〳〵それでハこうしてハいられぬ直に
 元トへかへして愚老がかたをぬかねバ成らぬそれをこち
 らへ ト取ツて行うとする

ア、モシ待て下さり升成程元トハチトわけある品でハご

ざれど今其詮義立をいたしてハ又御行衛を失う道理

どうぞ此方へお売り被成てハ下さり升ぬか

サアふだんこんににするお松どの、頼ミとい、こなさん

達もその様にいわる、

(三十八丁オ)

から随分ずいぶん売ても進上しんじやうがコレ必ズ跡でた、りのない様

其心切を無にいたして其許ゆるぎさまへ御難義ごなんぎをかける様な事

ハ仕らぬシテそのあなたへハ

根がくらしい代口物ゆへかわしハ高錢たかぜんを取らずに先キの

い、直なが五十兩

サ、よくござるなんと寺泊とまりの本陣ほんじん迄持参ちんいたして金子

調ちよんちやう達致ス様にそれ迄ほげしやく拜借はいしやくが

ア、めつそうなわしが代口物ならよけれど金と引がへで

なくつてハ売ぬ約そく

スリヤ只今直に

翫 お金が出来りやア尊像ハ

団 それじやと申て大まいの

翫 金がなけりやア代口物を

団 そふでハ有ふが

(三十八丁ウ)

翫 そんなら金子を

団 サアそれハ

翫 出来ねバ品を

団 サア

兩人 サアくく

翫 どうして下さるのだ

花 ト団十郎当惑とふゆのこなし此時花友中へわけ入り

花 ア、モシ御待被成とふゆ升いかにも只今金子をさし上升ふ

花 サア待ていやしやんせ○モシおまへさん一寸お目にかゝ

花 りとふござり升

とら アノわたしに ト合方

花 サア其用と申升るハ外でもござり升ぬお聞なさるゝ通り

花 の手づめの金わたしたくのやうなるふつゝかなものでもお

花 買被成て下さり升るか

(三十九丁オ)

とら 何おまへを○買なくつておまへならたつた壹年で五十兩

花 に買升ふ然しかも爰こゝへ手付にせうと持て来た五十兩それ改め

花 て見さつしやい

花 そんならあなた此金でチエ、有がたふござり升

翫 ト渡スを取て

花 手見せ金なら直に相談が出来なくつてサ

花 サアこちの人わたしにいとまを

団 ヲ、よこしまながら手詰のなんぎそれゆへに其身を売つ

花 て某たががきうなんすくうそなたの心庭こゝろコレ何にもいわぬ嬉

花 しいぞよ

花 なんのマア譬たとへへ死ぬとも夫トの為此身をけがすハいとわ

花 ねど勤つとめした身とうとまりやうそれ計ツかりが心にかゝり

花 何か扱あつか某故に肌けがしつらいがいにしづめた大忍ぢん

花 未來までなんの替りてよいものか

花 それ聞て落付たわいなア

花 イヤあきもあかれもせぬなかゆへそのなげきハ尤至極し

花 かし長い年ン

翫 でもなし

翫 一年立ツハ夢ゆめの間サイヤ立といへハ相談出来たらこつち

翫 もお立ちに

とら 証文ハあしたゆつくり

花 左様でござる手前此様な義不得でござれば宜敷よふに

花 こちの人モウ行升ぞへ早ふ眼病本腹してどふぞ逢に来て

花 下さんせ

団 ヲ、随分わが身もそく才で

翫 それ代口物ハしつかりおまへに

花 ト見物に見へるやうに喜せるの雁首を抜吹かへて帛

花 に包ミテ団十郎に渡ス

とら 金ハおまへに渡し升たぞへ

翫 是で勘定さらりとすんだ

団 何角あなたのお世話さま

翫 なんのおまへ捨る神ありや

(四十丁オ)

とら 助けの駕で ト手を取

団 モウ行きやるか

花 さらにござんす

団 トツカくと門口へ出て駕籠へのり泣落ス

アコレ ト立懸る抱子又泣翫右衛門門口をびつしやりメ

翫 いそげ

高乃 合点んだ

トいつさんに此人数花道へかゝる向ふ高麗蔵ぶつ

さき羽織大小にて留守居てうちんを持し若衆の仲

間先きにせうぶ皮の侍付出て来り

高麗蔵 六の町の稽古所と申ハ何れじや

侍 慥か向ふの宅にござり升

高 案内いたせ

(四十丁ウ)

仲間 ハツ〇 トぶたいへ来り

たのもふく

ハ、あとなたでござるすあるじ小万ハるすにござる

イヤく此方に逸見雅次郎どのと申がおらるゝと承ツた

が左様な御人ハ

団 何雅次郎ハ手前でござる何れよりお越し被成升た

高 イヤ苦しくない物〇こりやく其方ハ先キへ参り同役衆

に手前跡より乗船致す程にお待合被成ずとお先へお出被

成る、様に申て来やれ

中間 かしまつてござり升

高 ア、こりや直様是へ迎に参れ

両人 ハツ ト足早に橋が、りへは入る

団 そふいふお声ハ

高 名越長兵衛でござる雅次郎どのにハ一別以来

団 何名越氏とやこれハく思ひがけない〇マ、そこハはし

近まづくあれへ

(四十二丁オ)

高 然らバ御免下されい

ト合方に成り高麗蔵上へ通り宜住ふ

団 イヤモ誠に貴殿にお目にかゝるも面目もなき此仕合宝詮

義に国遠シなして早三ヶ年拙者が胸中御推量下されいシ

テ此地へお下り被成し子細ハ

高 養父実父の計らざる御難義去りながら最早今日にせまた

る日延の限り今もつて相しれねバ是非もなき仕合それ共

又よき御了簡もござつてか只今磯平が此所にござるよし

を申聞たゆへ早速に尋ね承つてござる

団 只今と成つて一言半句の申上やうもござり升ぬが養父四

郎左衛門がうしないし文宣王の像ハはからず只今手に入

りしゆへ先ツ一ト品をさし出し宗近の刀の義ハ今しばら

く御猶免ンを願わふかとぞんじ升る

高 ナニ文宣王の像が手に入りしとな

団 ハ、ツ則是に トふくさ包を出ス
高 嘸心配さどしんぱいの召れたでござろふ美鳥が縁えんにつながれば手前も

よりく心を尽し申たれど○
ト改め見てきせるの雁首かんとびを取

(四十二丁ウ)

団 雅次郎お身ハ狂気致されたかイヤサ血迷ツたのじやな
高 ナニ尊像が何とぞいたし升したか
高 譬へ眼病たり共みすくしれた○サさぐつておミやれ

団 ト渡ス団十郎撫て見て驚き
高 や、こりやコレ喜せるのエ、フムそふだ
高 こりやきつそうしていづくへ参る

団 衞りに参つた兩人の

高 ヤア是程の事工むものがそこらにうろくしておらふか

(貼紙抹消)「たゞし」

団 ハツ

高 サ、その眼病を付込んでかたりし曲者くまものどうしてお身の手
高 にあわふか

団 でハござれ共手延に成ツてハ宝の
高 詮義せんぎせふにもその業病

団 チエ、 ト口おしきこなし

(四十二丁オ)

高 勞して功なき今後悔エ、見さげ果たるうろたへものめが
団 ハツ ト平伏して無念の思入

高 殊にハ磯平に様子を聞バむかし馴染ミの女が元へ便ツて
高 爰へ来りしうつけ親の大事もうわの空詮義もよそに身を

持崩し両眼しいも天罰としらざるかコナ不孝ものめか

侍 ト此時いぜんの中問侍かて来り

高 ハツお迎ひ

高 ヲ、直さま参る ト立上る

団 ア、イヤ御ぞんじなきゆへさやふ思召ハむりならねど去
高 年の春のそふどふより宝詮義に心をくだき昼夜をわかた
高 ずかけめぐりついにハひいの煩ひ

高 ヤアその言訳を聞にや参らぬ同役諸共船場より夜船に乗
高 ツて寺泊りの陣屋へ夜明る迄に着いたし甚左衛門が切腹
高 の席に立合と老臣しん方の厳きびしい仰せ

(四十二丁ウ)

団 エ、コレ此眼がかたし見へたなら叶わぬ迄も追付てせめ
高 て尊像一品なりと

高 シテそやつが形り格向

高 サア詞ハ耳にのこれ共

高 盲目なればせうこともなく

高 それに付ても磯平おまつ只今にも戻りなバ

高 手分をなしてとりかへさバ

高 夜明ぬ内に本陣迄

高 かならずきつそう

高 長兵衛どの

高 相待申

団 ト唄に成りて高麗蔵侍中間付て向うへは入る

高 長兵衛殿何とぞおとりなしにて実父甚左衛門の助命いた
高 し升る様偏御前ていをお願申長兵衛どの長○ア、モウい

そいで行かれたそうな○

(四十三丁オ)

ト誂の合方に成

宝日延の日限もこよひ限りとハ聞つれ共御切腹とハ思わざりしにエ、これ何をいつても此眼病只此上のたのみに思ふハ磯平お松どふぞ二人りがはたらきにてせめて尊像一品にても手に入らバそれをかうに日延の追願ひも成ふもの今にあんぴをきかせぬハかたりの行衛しれざるか○

ト此時四ツの鐘鳴る

ヤ、アリヤ後夜の鐘南無三父の寿命も今二夕時こりやかうしてハ○

ト我をわすれ一ツさんに行うとして門口にあたりたぢくゝと跡へ戻りいぜんの投たる足付の日向膳につま付き

行も行れぬ此眼病チエ、○

トどうとすわり件の膳をぶたいへ打付

口おしい

トつかみこわす此仕組宜敷道具廻る

本ぶたい向黒幕上手へ寄せて番小家行燈に古町と印し下手松の立木

(四十三丁ウ)

同釣枝小舟底干して有日覆分半月をおろし爰にいぜんの四ツ手かごおろし友右衛門花友をうしろ抱きにして宗兵衛翫右衛門いせん

にて酒盛りをして居る見得浪の音にて道具留る

翫右衛門 是サ姉エわりいた了簡だ親分の女房に成りやいふ目が出ら

ア

とら蔵 おぬしが亭主といふのハ目くらじやアねへかそれじやア

いふめが出ねへじやアねへか

宗兵衛 なんだ手めへのいふのハしやれだか理屈だかわからねへ

友右衛門 エ、むだをいふな○コレ美鳥そなたも気強いものだなア

おれが屋敷に居る内から惚たともく心ン底こなたに首ツたけ付つ廻しつ口説てもぬつぱりそつぱりい、ぬけて埒が明ずモウかふ成ツたら籠の鳥いやでもおふでもだいて寝るモウい、かげんにいろよい返事を

ト抱よせてしなだれる花友かふりをふり居る

乃六 これく手めへ達ばつかりのまずと

(四十四丁オ)

大和平 そうよかんじんの娘めにさ、ねへのか

ふく蔵 まだ祝言のしねへうちから

高吉 こつちへよこせく

翫右 ヲイしぶきがはねるからしづかに物をいわつせへこつち

ハ命がけの仕事をして来たのだよ

とら 酒をあびてもあきたらねへのだサア花嫁御

花友 エ、けがらわしい扱ハわしをこうせう為五十兩の金を出して

して

とら ヲットその金ハ此通りの石ごろ

翫右 お目くに渡したハソレおれがきせるの雁首よ正直の代口

物ハ則是に

友 落すといけねへこつちへよこせ トとる

花 ヲ、スリや誠のたからハ

友 どつこいしよこれがほしくバだかれてぬるか

(四十四丁ウ)

花 チエ、いをふよふない極悪人死ンでもはだ身を

宗 いけごうじやうなとちあまめ

友 エ、めんどうな手足をひつばれ

皆々 合点だ○

ト花友をとらへよふとするをふり払ふ翫右衛門脇差

をぬきふり廻す

ヤアあぶねへくつらまへろく

ト山卸に成り向ふ分吉三郎小田原をともし足早に出

て来り

吉三郎 最前美鳥さまへろうぜきしたハ此浜手そうだ

トぶたいへ来り此ていを見てやにわにかきのけ皆々

を左右へなげる

翫右 ヤアおつなやつが出現したぞよ

花 そなたハ磯平よふ来てたもつたわしやどうせうくぞい

のふ

(四十五丁オ)

吉 フムシテ又誠の尊像ハ

花 浪人なした小路伴内

友 おれがしつかり持ているのだ

吉 そうきいちやア大ばんじやくだ先おのれから

友 た、んでしまへ

皆々 がつてんだ

ト早禪の節に成皆くかゝる立廻り双方急度見へこ

れより仕抜の立廻りいぜんのてんま船を道具をか

せに面白き立廻り此内友右衛門鬻の間へ尊像を入

猿轡をはませ翫右衛門手伝て上手の番小家の内へ

は入る戸をメル吉三郎皆々をしとめほつと息をつ

くバタく子家の内分花友取乱したる形りにて走

り出

花友 くやしい口おしいわいのふ

(四十五丁ウ)

吉 ヤ、扱ハ大勢を相手にする内

花 伴内とあの悪るものがアノ番屋の内にて恥かしいくわ

いのふ

吉 エ、、悪く迄不法の小路伴内一寸だめしに

ト此いぜん分友右衛門頬冠り後にうかゝひ

友右 ウフハ、、悪迄はらが立かくやしいか美鳥ハおれがむ

り往生心の俣に抱て寝た人の花とせんよりも美鳥もばら

して奴めも主従共に死出三途念仏ほざいて覚期しろ

何をこしやくな○

ト切て懸るかいくゞつて立廻り友右衛門を切るとら

藏宗兵衛打て行を切下ゲかへす刀に翫右衛門を及

び腰に切うとしてあやまつて花友を大げさに切是

にてワツト倒れる

や、美鳥様を手が廻ツて

ヲ、おのれハ主を殺したな

(四十六丁オ)

吉 エ、毒くわばさら

友 所を

ト組付手追の宗兵衛足へかぢり付をふり切ッて蹴り

返シとら蔵のみけんを切る是にて逃ては入るト

友右衛門と立廻ッて馬乗りにしてとゞめをさし宜

敷息をついて下手の花友を抱起し

吉 美鳥さまハ手ハ浅いきう所ハよけてござり升モシお心を

たしかにエ、ことハきれたかエ、とんでもねへ事をした

ナア下郎のうでのにぶいゆへツイ手が廻ッてモシかんに

んさつしやり升尊像を若旦那へ手渡しして直に跡から追

付升何ハともあれさし当りソレ○

ト友右衛門の懐中を尋ねなきゆへ驚きふと頬冠りに

心付手早く取ッてあたまをさぐり鬚の間々取出し

チエ、かたじけない○

(四十六丁ウ)

トツカドくと花道中程迄行此折花友うんとこへして

起上りばつたりと落入る

ゆるして下され南む阿ミだ仏○そうだ

ト双盤にて向うへ走りは入る此仕組よろしく道具廻

る

本舞台元トの稽古所の道具へ戻り爰に団十郎抱子を側に寝かせ腕
組をして居る合方にて道具留る

団十郎 両眼しいたる身をもつてどふして今宵二品が手に入うは

づが有ふぞとやかふいふ間に時刻がうつる覚期極めて切

腹なし親人なりかわり命を捨て又のひのべをそれに付て

も心にかゝるハ美鳥の身の上殊にハ子中なしたる女房の

帰らぬ内にそうじやく

ト隣りの和讃に成り辺りの大小をさぐり切腹の仕度

する向うかしょうか出て来り

しょうか 今宵つゞまる宝の日のべ夜明を待て舅御にハ御切腹その

(四十七丁オ)

お命を助る手だんハ

死る今宵にめぐり来て肉身わけた子忤に逢ふも尽せぬ一

世のきゑん

しょう 夫ト故にハ石ともなり鬼共成ッて二品を

団 見ることならぬ我子のおもざし

しょう 思へばいんぐわな

兩人 身のうへじやなア

ト又和讃に成りしょうかしておれてぶたいへござる此内

団十郎支度をするしょうか門口を明ケ団十郎悔りし

て脇ざしを隠し

団 たれじやく

しょう アイわたしでござんす

団 お松かいこふ手間がとれた少しハ手蔓にとり付たか

しょう とこを尋ねてもかいくれ行衛がそうして美鳥さんにハド

こへ

(四十七丁ウ)

ござんしたへ

団 すいなようでもまだおぼ子どふもそなたへ義理立すと本

町の知辺のかたへ

しう なんのマアわしにしんしやくそれハそうとこちの人わた

しやおまへにむしんがある

団 ナニ改ツたむしんとハ

しう サア此年月おまへの行衛がどふぞろぐり逢たいと八彦の

明神様へ大願ン立て百日の夜参り丁度こよいが満願ン日

に思はずめぐり逢ふたゆへ何を置てもお礼参りに

団 女のみそらで百日の夜参りそれも此身に逢ふ為ハテ心切

成フムこりや参ツて来たがよかるふ

しう そんなら一寸髪を撫付

団 なんの夜なら髪かたち

(四十八丁オ)

しう それじやといふて神ハひれいをうけぬとやら

団 そんなら早うしたがよい

しう 一寸此子を抱て下さんせ

団 ト此時抱子泣立るしうかハ鏡台を出ス

ヲ、たがよく母ハ用もあるしちつとの内と、にだかつ

てハ、ヲ、よい子だなア○抱取たれば直に泣やんだどう

でも侍の子程ある○お松や参詣にハ毎夜サ此坊主めを連

れていきやるか

しう アイどふして置いていかれ升うぞいなア

団 ヤレかわいや一生のわかれなれど

しう なんとかわしやんす

団 せめてまつごの

しう エ

団 まつ此様に親子三人むつまじうしているを親人にお目に

かけたら

(四十八丁ウ)

しう 撫お悦びで有うのふ

今宵にせまるお身の御難義どふぞ首尾よふ忍び入り

団 ナニしのおとハ

しう サア日のべの願ひを

団 どふぞ叶へて下されバよいなア

しう ム、○

ト赤子泣本釣鐘凄き合方に成り橋懸り分文五郎翫太

郎黒出立盗賊の拵へにて得ものを引提ケ跡分三階

中通り不残黒装束がندوقを銘く持出て文五郎

そつと門口を明目くばせするしうか大事なとい

ふこなし是にてしうかわらじをはかせ翫太郎丸ぐ

けをメてやる

ほんにわたし計りの支度しておまへに寝所をしいて上る

ので有た物

団 イヤく我身の戻る迄起ていづバあんまり義理がわるか

ふかい

(四十九丁オ)

しう ト蓑盆を出ス

なんじやいなア女房に義理が入るものかいなア

トさしづする是にて手下の皆く拔足して床を敷屏

風を後へ立る

団 ハテ爰へ出して置バおれが勝手に取其様な事をする間に

早う参詣して来やいの ト又赤子泣

しう ヨウ待ツて居やつたのサはだへとり升う

ト取赤子泣止ム

団 かゝの所へ行おつたら直にだまりおつたな

しう こちの人まだマアおまへに粥をあげるので有ツたドレ一

寸膳拵へて

団 コレくわしハ此眼病をやんでから夜ハちつとも喰事ハ

せぬ程に

しう そんなら直に寝てあたゝこうして待て居て下さんせ

ト眞吸付出ス

団 扱ハ久しぶりで御ちそうが有ると見へるわへ

しう エ、何いわしやんすやら

ト門口へ出る団十郎こなし有ツて

(四十九丁ウ)

団 随分無事で

しう かへらでかいなア○ ト空を見上ゲ星を操ツて

今宵のぶん夜も最早子の刻八彦やじこのの宿ハ破軍しゅくはンの劔先

此身を捨てても舅御を

団 何舅とハ

しう サア舅御様の御不時も共に

団 助ん為に此身を捨て

しう 今宵ハ是非共

文五郎 そんなら

大ぜい 頭ら

団 門にハどふやら

しう アモシ ト門口をしやんとメ

団 氣を付やれ

(五十丁オ)

しう 往て来るぞへ○ トコレにてしうか花道の付際へ行

サ行うかへ

ト誂らいの合方に成りしうか男のようにこなし抱子

をいだし手下付て大やうに向うへは入る団十郎こ

なし有ツて門口へかきがねをかけ蒲団の上へ直り

また脇ざしを出し支度して

団 生死不定ハ世の中のならひといへどほいまいわかれおま

つハ舅の急難をすくわん為に夜るの道われハ預けの親の

為切腹なして宝の日のべそれ共しらで神詣帰り来たツて

様子をしらバ嘸やなげかん二ツにハ美鳥がかくと聞たな

ら嘸残りおふ思ふであるイヤく磯平が戻らバ何かのさ

またげ○モシ親父さま倅が事をたのみ升ア、コレどふぞ

一筆書のこし二人りの女房の貞節や我子の事を頼ミたい

にも目ハ見へずなさない身の形り行じやなア

トバタく成り吉三郎走り出て来る団十郎肌をぬ

きかける吉三郎

(五十丁ウ)

内へ入り息をついて

吉三郎 エ、若旦那モシ早まる所でねへ誠の尊像手に入り升した

団 ヲ、磯平かスリや其方がはたらきにて

吉 サア小路伴内といふ浪人有ツて許より美鳥様にむたいを

い、かけ聞入れないを根にもつてわるものどもをかたらい美鳥様の跡を付ろうぜきなせしやつばらがあつまるところハ北浜と案に違わずおじやう様をよつてか、つてむたいの有ぜう中へ飛込ミ切てく切まくりかとふ人はじめ伴内までのこらずしとめて取かへし則是に

ト尊像を渡ス

団 チエ、忝けないシテく美鳥ハ

吉 サア其申訳ハ南むあミだ仏 ト腹へ突立る

団 や、何ゆへ切腹なせしそ様子をいやれな、なんと

吉 サア力ラづくにはおとらねど下郎のかなしさなま兵法此

身の運も月あかりかへす刀にあやまつて節角助た美鳥様のあばらをかけて

(五十二丁オ)

あいな御最期に思ハぬ事ながら主を殺した申わけす
いりようして下さり升せ

団 譬へなんじが打うとも助けんための手の廻り早まつた事
しやつたなア幸い美鳥も某ゆへくがい沈ム覚期ハあれ
どわるもの共に手込ミになり

吉 はてハ刃バに非業の御最期

団 こうも不運に主従夫婦

吉 いかなる宿世のごうなるか

団 情なき身の

吉 成り行じやなア ト此時寺鐘鳴

団 や、アリやモウ九ツ

吉 ちつとも早く本陣へ

団 此品さし上げ刀の日のべを

(五十二丁ウ)

吉 とはいへ眼病どうしておひとり

団 親の命を助る一心 ト此時下手の内分蔵藏職を持出かけ

成蔵 様子ハ荒増シ聞升たわしがてんまにのせ申

吉 寺泊り迄十里一ト飛

ト橋が、り分伺い寄とら蔵疵口をしぱり乍

とら蔵 さつきのへんぼう

ト打てか、るを団十郎一寸立廻り職を引たくる虎蔵

吉 見事に返る吉三郎手負ながら引付

団 ちつとも早う ト成蔵吉三郎見て

吉 これがわかれば

とら 何を ト起上るを捻ふせながら

吉 未練な事を

団 さらバ

(五十二丁オ)

ト職を杖に一さんに向ふへ吉三郎ハ引廻ス成蔵下に
ふるへて居る仕組宜道具廻る

本舞台三間の間折廻し平ぶたい寺泊本陣奥座敷の体爰に勘弥袴着
附刀掛へ大小を懸ケ蓑盆脇机料紙硯箱を取ちらし思案して居る合
方にて道具留る

勘弥 佞人上ミにあらバ一軍をミな招くの道理権津の御家代々

武功の

(貼紙)「筋目と有ツて上ミより殿御拝領の文宣王の黄金の尊像

まつた小狐丸の一振り某へ」

守護の役目被仰付是迄御奉公向何一ツ怠りハなければ共ふつてわいたる不慮のさいなん時日も明ればはやおと、し暮におよんではからずふんじつ最早日延もどゞの猶免ン今宵につゞまる命のせつば頼ミも綱もきれ果しかせめてハ義理ある四郎三郎夫婦のものへ一筆なりと書送らんフムく〇

ト思案のこなし是をキツカケ独吟に成り硯箱を引よ

せ巻紙

(五十二丁ウ)

紙を取上書置をしたゝめ筆を一寸留て

一命捨るハ是非なけれど御宝出ねバ犬死同前此世の悪名死ンての汚名早運命ハ尽果しかチエ、口おしや今と相成り悔むも恥辱人の来ぬ間にいさぎよく生害なさん

トこなし二の句の独吟に成り肌をぬき書置の上書を

して褥の下へ置ふとしてのりにて汚る、仕方をし

て料紙箱の上へのせ上手へ置刀掛の脇さしを持そ

ゆるこれ迄に独吟納る時の鐘向ふバたくに成り

武五郎又八とら蔵嶋蔵成蔵純五郎いぜんの黒の忍

の形り足早に出て来り勘弥腹を切らんとしたる一

腰を鞘へお納め帯刀して刀をおつ取身構へする武

五郎合図を腮にてしらせるばらくと取巻

武五郎 おのれハ逸見甚右衛門

又八 爰にうせると聞たゆへ

(五十三丁オ)

とら蔵 おいら達が迎に来た

嶋蔵 何やら聞てへ御用がある様に

成蔵 しよびいて来いと頭のい、付

すみ五郎 両腰渡してそのうへで

武 おいらと一所に

六人 きりくあゆめ

勘 やアぼうじゃくぶじんな山賊共最早武運に尽たるそれが

し能キ折からのめいどの土産わいらいちく死出三途首

さしべて覚期なせ

武 エ、めんどうなばらして仕まへ

五人 合点だ

トふと撥のどんくに成り勘弥六人を相手に早切り

の立廻り有ツて見得是合好ミの鳴物に成り能き見

得にて道具廻る

(五十三丁ウ)

本舞台正面真中本陣の門外左右黒堀上手に仕懸もの、辻行燈日覆

合松の釣枝爰にしうかいぜんの形り懐口に抱子を入れ立身誂好ミ

の合方にて道具留る

しうか 手下のやつらにい、付やつたがどふぞ首尾よくやつてく

れ、バイ、が

ト此折福蔵袴も、立襷鉢巻十手にて

福蔵 とつた

ト後合羽がいぜめに抱くかすめてどんくに成りし

うか見向もせづ振放す打てか、るを見事に投る是

にて赤子啼

しうか ヲ、いさくたアがよくねんねこせへねんねがもりハ

とこへいた○

ト乃六岡六かゝる立廻つて

山を越へて○ ト見事に投る

里へいた

トしうかうたいながら高吉翫竹かゝる立廻り市太郎

皆々

(五十四丁オ)

しのきの立廻り此内赤子の尿を懸る仕かけにて本

水顔へかゝる立廻りト握り拳にてちどりに下へ

はかせしうか急度見込是にて六人ゑびおれに成る

上手バタく翫太郎いぜんの形りにて欠出て来り

しうかを見て

翫太郎

頭爰にか最せんおまへのい、付ゆへ手下のやつらを皆連

れてまんまと首尾よく込ミ入たが中く手ごわい侍ゆへ

おいら達にやア手に合ぬそれゆへ頭の迎に来たサアく

早く来て下だせへ

しう そういふ事なら行もせう此子が有つてハ足手まどいコレ

手めへに預る程に汐見山の隠れ家へ

翫 よふござんす氣遣ひさなすな此子ハしつかり預り升た

ト翫太郎抱子をとろふとする此折心付起上つてとつ

しう 跡構わずと

(五十四丁ウ)

翫 ヲ、合点だ

ト翫太郎抱子を懐へいつさんに向ふへ行皆々是を追

欠は入るをしうか見送つて

(以下貼紙)

「しう 悴を渡して遣つたれば心が、りハねへといふもの此うへ

ハそふれ

ト本陣の門へ入ふとする内分いぜんの中通り大勢と

つたくと十手にてしうかへ打てかゝる早き立廻

り成りト皆々をふまへ急度見へ奥バタく成

り勘弥いぜんの形りぬぎかけつまま股立にてしう

かを見付

勘弥

ヤア噂サに聞及ぶ盗賊自来也汝が愛子の子悴迄得より召

捕有る上ハのがれぬ縄目だ覚期なせ

しう

何スリヤアノわが子ハ得よりもアノ召捕に

ト皆々起上つて立廻り有て

しう ナニ逸見○ ト耳立ツ見入

手むかひ致さぬ証拠ハ両腰

ト大小を勘弥の前へ投出ス此折乃六

乃六 扱こそ自来也

(五十五丁オ)

トしうかへ乃六かゝるを上手へ突廻し当る木の頭是

にて乃六辻行燈へへたる仕かけにて辻行燈胴折れ

に成る勘弥あきれる思入

勘 女にまれなる

ト(貼紙)「しうか勘弥を見る所へウムト息込をは
るしうかねめ付乃六を見るヲニツ木頭」

しう ムフハ、、、、

トこれをきザミ時の鐘の送りにて宜

ひ や う し 満 来

(五十五丁ウ、五十七丁オまで白紙)

(五十七丁ウ)

嘉永四辛亥年九月大吉日

紙員 四十葉

千穂 万歳

大 入 叶

本主 松嶋松作

(五十八丁オ中扉)

当亥の しうか

秋狂言 友右衛門

新 板 越 白 浪 高麗蔵

第貳番目大切 橘蔵

寺泊陣屋の場 ふく蔵

岡六

高吉

くり平

吉蔵

大和平

乃六

大せゐ

わかいしゆ

勘弥

(五十八丁ウ白紙)

(五十九丁オ)

本舞台三間の間高足の文住所軒口へニツ引龍の紋付たる幕を張り
向大形の襖銀蠟をてらし上下網代堀日覆分紅葉の釣枝二重上手に

友右衛門上下大小好ミの拵へ下手に高麗蔵上下衣装にて平ふたい

勘弥麻上下受たる拵へ栗平吉蔵扣へ居る見得中の舞にて幕明

栗平 おしての強訴ハ

吉蔵 ぶ礼でござらふ

高麗蔵 兩人扣い

兩人 ハツ

高 紛失の宝詮義日延の日限とはいへ共願いと申を取上ぬハ

役目の不覚

友右衛門 名越氏いかにお若イ洩そりや何をおいやる逸見甚右衛門

が科といふハ殿より預りの小狐丸の一腰盗まれたハお

と、しの暮詮義中三百日のゆうめんを願ひ又二百日又百

日と出入三年立てても知れぬ宝がモウ

(五十九丁ウ)

とつ百年立てもしれる筈ハない腹を切るのがいたいゆへ

すのこんにやくの言ごしらへてもモウ叶わぬ殿より御用

意蒙ツてかき首にしてもあきたらねどほうゆうのよしみ

二ツにハ又名越長兵衛殿貴殿の妹美鳥ハ甚右衛門が粹雅

次郎と縁を組れいわバツ家のちじよくもあれバじん

ぜうの切腹に申なだめしを忝いと思ハづ又候刻延べに

参りし甚左衛門(さざ)武士に似合ぬひきやう至極自身に切腹が

ならずハかくいふ鹿野苑軍八が介錯いたして遣そふドレ

ト立かゝるこま蔵さゝへ

高 これハ又御短慮千万全く甚右衛門殿切腹の刻延召るゝに

はござらぬ

友 シテ又何ゆへ

勘弥

ハ、ツ宝紛失いたせし今切腹ハ兼ての覚期しかしながら拙者相果し迎大切の小狐丸殿のお手に入るにもあらず元より右の一腰ハ他国出しとも存ぜずまさしくお家をくつがへさんと計る倭人深く秘め置とすいりやういたせしゆへ当国ハ他領迄草をわかつて詮義せしに此程

(六十丁オ)

笠松峠に自来也ト申山賊すんで近隣のごう家へ込ミ入り打物又ハ尊像に心をかくるとの風聞扱こそ小狐の一腰まつた悴雅次郎養子に遣せし夏目四郎太夫所持の文宣王の像迎も若シやかれがしわざにもやと存付し折りも折只今出仕の道すがら計らずカノ自来也を召捕手勢にけいご申付御門迄網乗物にて引立参り升してござる

高

ナニスリヤ此程國中をさわがす盗賊自来也を貴殿召捕られしとな今に初ぬ逸見氏のお手がら其曲者是へ呼出し火水を以テごうもんなし甚右衛門殿のおめいをすみやかにはらずが肝要

友

名越殿のお詞でハござれ共その自来也ハ此頃の出来星刀紛失ハ三年跡かれが覚へもなき事を無理ごうもんいたすハ役目の落度まつた文宣王の像ハ鎌倉にて四郎太夫失いしと計り誠ハ甚右衛門殿御手前の子息雅次郎夏目の家へ養子と成四郎三郎とて此国許迄も聞へし

(六十丁ウ)

ほうらつ養父の落度もかへり見ず持出して質入しなし遣

い捨しにうたがいなしと殿の堅察ツそれゆへ忍びくゝに

国遠ンなせし雅次郎を尋ねしに主ばつ天ばつ先刻当所の

船場へ上りしを組子をもつて召捕り表門迄引立参つた

ナニスリヤ四郎左衛門へ養子に遣し国遠ンなせし悴雅二

郎が

両眼しいたる昼のふくろう手もぬらさづからめ取此場に

おいて尊像の行衛ほざかしてお目にかけう

それ迎も実父甚右衛門殿今宵にせまる命と聞父にかわつ

て切腹せんと

さまよい来りし悴が存念〇何ハしかれ国の盗賊自来も爰

へ呼出し一ト通り刀の詮義なした上覚へなき事明白の上

ハ詮なしいさぎよく此場を去らず

切腹さすハ殿のお情

それ呼出せ

ハツ ト栗平ハ花道吉蔵ハ東のあゆみの付際へ行

くり 召取参りし笠松峠の山賊尾形自来也

吉蔵 夏目四郎三郎事当時逸見雅次郎

両人 いそぎこれへ ト此時向うにて

大ぜい 心得升した

ト時の太鼓に成り花道より若イ衆の捕手三人あみのり物をかつき岡六前まくの抱子をいただき中通り二人同半天も、引十手にて附そい東の揚まくぐわか

いしゆの四天同じくあみのり物をかつき大和平の

半天侍団十郎の大小をか、へ外中通り二人十手に
て附添ひ出て双方並よく舞たい上下へのり物を引
すへる

岡六 仰に随ひ盜賊自来也

(六十二丁ウ)

大和平 逸見雅次郎

ミなく、引すへ升してござり升る

友 それ引出せ

ミなく、きりく、出升せい

ト本てうしの相方下のあみのり物の内より前まくの

しうか腕ふと寄り繩にか、り大よふに前へ出て真

中へ住ふ是ト一時に上手の乗物の内より団十郎腰

繩にてしほれ足ざくり前に前へ出てうづくまるしう

か団十郎を見て

しう ヤアおまへ○イ、エ今とろく、と寝たうちに爰ハどこだ

ア、寺泊りの陣屋だな

勘 倅雅次郎何うろたへて当国へハさまよひ参た養父のおめ

いをす、ぎ家を起さうとハせいでなげきのうへになげき

をかける不孝ものめが

(六十二丁オ)

団 そういふおこへハ親人さまお身のうへが気かわしさに尋

ね下りし折もおりおさせるつミもなき某を此繩目何ハし

かれ御存命にてチエ、忝い

友 ヤイ四郎三郎只今承れバおさせるつみなきを繩目にか、

りしとの述懐汝鎌倉にて身持だじやくに遊里へ入り込ミ

養父四郎太夫が數代所持の黄金の像を盗出し質入れなし

てほうらつに遣ひなくせし事得より殿にハ御堅察ツ有ツ

て忍びく、にそちが行衛尋ねしに当所の船場へさまよい

来りしこそ天のめうばつのがれぬ所とかんぷくなしサア

ありていに白状おしやれ

フム左にハ慥かに軍八殿扱ハ某ほうらつにて養父の宝う

しないしとのお疑ひにて身に覚なき此繩目を

ヤア覚へないとハ一ト通りの申訳此上ハ高手にく、し上

ゲごうもんなして白状さすそれ責道具の用意いたせ

ミなく、心得升した

(六十二丁ウ)

高 ヤレまで者共いまだ雅二郎こたへもなきうちそこつ千万

友 エ、又しても妹の縁有雅二郎をかばい召るか

高 イ、や大切成る宝の詮義に一家縁者のしや別ハなけれど

一応の吟味とげぬうちにかしやくのせめハ御法にござら

ぬナニ雅二郎申上る事有らバちく一に言上おしやれ

ハ、ツ実父甚右衛門紛失の宝詮義の日のべも今日限り切

腹との沙汰承りしゆへ何卒眼病の某父にかわり腹切て今

暫くの日のべを願ひ父の命をこひうけて今一応詮義をと

心定めし時も時家来宇佐美磯平がはたらきにて養父四郎

太夫が失ひし文宣王の尊像計らずも手に入り是迄持参仕

り升してござり升る

何スリヤ黄金の像が

友 ト嬉しきこなし有ツて気をかへしらぬ思入

イヤくそりや偽せものに違ひない

高 贗せか誠ハ見分て遣ス其品これへ

(六十三丁オ)

くり ハツ

団 御前よしなに ト団十郎今受取高麗蔵に見せる

高 ホ、ウうたがいもなき黄金の像出かした是にて養父がお

めいハはれしぞそれ

団 勘 チエ、かたじけない

高 尊像出る上からハそれ雅次郎に大小を

岡六 ハツ ト団十郎へ大小を渡すいましめをとく

高 此よし殿へ申上汝が願ひもすいきよいたさん先ツそれま

でハ大せつに

ト又くり平取次で団十郎へ渡す団十郎懐中して

団 ハ、ツ忝いと申も長兵衛殿の御慈悲

高 此上ハ逸見氏

友 時刻のびれば生死のさかい

団 それもひとへに名越氏

(六十三丁ウ)

高 万事ハ胸に

勘 今宵の納り

団 父が助命も

高 こいつをせごして

詮義の落着相待申

ト友右衛門会釈して序の舞に成り正面の襖の内へは

入る

友 サ甚右衛門今半時の其内に刀の有家しれざれば御身ハ切

勘 腹

そりやはや拙者が覚期の前コレ自来也○
ト合方しうかの側へ行

是迄あまた諸々方々込入り奪ふその内にわけて劔に

心をかけ盗ミとりしと聞つるが小狐の腰ハ汝が奪ひし

にうたがいない包ず此場で白状いたせ

しう イ、ヤしらねへ覚へハねへ

勘 何さま音に聞へし盗賊自来也一応でハ申まじコレよく聞

ケよ是迄

(六十四丁オ)

尽す汝がせき悪く小狐一ぶり隠せし迎おのれがつみの聞

ゆるにあらざ火水を以テごうもんなしいたいめせぬ内

白状いたせ

しう

何さまごうかといへども金銀に目をかけづこつちも屈む

小狐の宝劔ぢに心をくだけ共手に入らざるハこりやて

つきり外に盗人ある証拠こちらが仲間にあるならば手に

入るるに手問ひまハなけれど今に有所のしれざるハ思ひ

がけねへ素人がどつかへうづめたに違ひハない盗人めう

り啞ハつかねへうたがいはらして下さり升せ

ト是にて友右衛門ぎつくりこなし有ツて

だまれ自来也思ひがけない素人が持っているハ奪いし者

をわりや存じて申のか

それがしれて有るならば譬へ大名高家でも直に込入り

盗むハなんのぞうさが有るものか行衛がしれねへそれゆへ

(六十四丁ウ)

友 ヤ

しう チト御詮義がまだるいかと存升る

ト 団十郎こなし有ツて

団 成程一ト通りハ聞へたがコレ爰をよふ聞よ其劔預りハ手

前が親人詮義の日延も今宵限り今半時立ツと御切腹なさ

らねバ成らぬしぎ存おる事ならバ只一ト言いかにも盗し

と白状さへすれば親人の命も助る道理ゑがたき宝といゝ

ながら器物ツの為に親の命失う忤が口惜しさ聞わけある

ならば自来也どうぞすいりやうしてくれいヤイ

トしうかこなし有て

しう そんならわたしが○イヤサわしが此場で盗しと白状すれバ

勘 切腹とゞまるのミならずお家をうかゞう倭人の詮義の手

懸り 忠義二ツを立さすも汝が心たつた一ツ鬼神に横道なしの

たとへどうぞ此場ですみやかに

ト是にてしうか胸をすへこなし有ツて

しう 成程なア孝行ハ天地の宝武士ハ忠義女ハ操切取はたらく

此身にも心が、りハアノ小忤いふに言ハれぬ大事のおさ

なご此身ハどんなけい

(六十五丁オ)

ざいにおおふ共おまへ方の孫とも子共思召どうぞ○ハ、

ハ、、、女のおよふに盗人が心ろを乱すもがきがすわいさ

団 いふ迄もない某もおもだ、ねど忤人ノの忤もあれバ思ひ

やる

しう その心さへ有るならバ何をか包まん白状せう

勘 スリヤ御宝を

しう 逸見の家に預りの小狐丸をうばいしハ当時越路にかくれ

ねへごうどうの張本かくいふ尾形自来也が盗取りしに違

ひないサ此上ハ立よつて御法の通り早くけいざい

扱こそさすがハ自来也よくぞ白状

友 然らバ其方が奪ひ取たるとな

団 シテく劔キハいづくに隠して

しう サアそれハ

友 有家をぬかさぬ其上に盗ぬものを盗んだと

(六十四丁ウ)

勘 白状いたせし汝が心

団 行衛がしれねバ父上にハ

しう スリヤどふ有ツても此場にて

友 切腹さすハまだしもお慈悲

勘 もはや近づく丑の上刻

団 チエ、口惜しいこりやいその品の有所いわねバわれく

しう 親子が一命のみか主君のお家にかゝわる大事

サアつらいかなしい其うきめをよそに見るのがわれらが

勘 商売しらぬ事ハどこ迄も

しう いわぬとあらバ○

是でも汝申さぬか

しう イ、ヤしらねへく責る程猶いわぬが盗人取ツたいふ一

ト言を落度にどうぞ殺して下せへなまながきが有るの

が却テ只口惜しいハ宝の行衛しらずに

(六十五丁オ)

死ぬのが

友 大かたこんな事で有うと思つたサ行衛がしれねバ甚右衛門とくく切腹おしやれ

勘 ア、イヤ其前方に拙者が拷問水子これへ

大和 ハツ

ト大和平のいだしし人形を引取刀を咽元トへ突付

勘 ヤイ自来也人の宝を我物と五常の道も弁へぬ放逸無ざんの盗賊思ひの外に今の詞忠孝貞操の道も弁へしれバ親子の愛情ハ嘸しりつらんこりや汝が呵責に苦しむハ身よりなせる自業自得夢にも知らぬ幼子も男の子なりやとがハ同ざい有所いわずバまつかうなして

しう ア、コレめつたな

団 サ、汝が悴をかばふのもわれく親子が宝ゆへ捨る命も思ひハひとつ我子かわいと思ふならどふぞ行衛を

(六十五丁ウ)

勘 サ白状せずハいつそ一ト突 ト勘弥さし付る

しう これく其子ハ現在あなた○サア現在親のその科にぐわんぜもない子を殺そふとハ

団 ひどうと思ハ、劔の行衛いふてくれ重罪人の盗賊に武士たるものが事をわけ是程に頼むを聞入れぬかコレ手をあわせて拝むわいのふ

しう イ、エイなそつちよりこつちからおかみとふても手は叶わづモウ此うへハ打明て

トいわふとして友右衛門に思入して

いふにいわれぬいんぐわな此身

団 そふでハ有ふがどふぞ有家を

しう しらぬといふが此身の誠

団 それでハ一人の親人が

しう つらいうき目も

団 前世の約束

(六十六丁オ)

友 ヤアむだにあらそいとくく用意

勘 白状せずバ悴ハ一ト突

しう それでも行衛ハ

団 サアくく

団 勘 な、なんと

ト此時奥にて八ツの時計鳴る勘弥団十郎こなし

団 や、もはや刻限 ト立かゝるを又引すへる

勘 兼ての覚期冥土の先がけ ト抱子をつらぬく

しう エ、かわいいや我子ハ ト寄ふとするを

団 おのれも道連れ

ト眼くら打に打てゆきしうかの肩先を切下る是にて

しう か団十郎の側へ倒れる団十郎ハ前に置たる尊

像に血汐かゝりしこなしにて手に取さぐりム、ト

もんぜつする友右衛門下へおりて

友 いつそ身共が手をおろして○

(六十六丁ウ)

ト抜かけるを勘弥一寸留めて友右衛門の刀に目を付

見込ム是にて友右衛門心付ちやつと刀を納め氣をかへ

ム、自来也がくたばるうへハ殿へ願ふて

スリヤ刻延を御主君へ

いかにもすいきよ致してくれふ

アノ其許が○ハテナア

然らバ逸見氏

軍八どの

後刻

ト顔見合ム、とこなし有ツてツイト奥へは入る此時

上下中廻りの半天侍六人出て勘弥にかゝる勘弥

立廻りてホン／＼と投る此内団十郎心付目の見得

るこなし是を見て勘弥をかこひ皆／＼を投退る是

にて六人上下へ逃ては入る此内しうか肌ぬぎかけ

起上り抱子を

(六十七丁オ)

見て

ヤこりや悴目が見ゆるか

ヲ、誠に○フム最前手にかけてし血汐したたり尊像にかゝ

ると等しく

年月惱ミしそちが眼病

忽チ平癒なしたるハ

黒白邪正を明らかに

大聖孔子の

靈徳成るか

親人

悴

兩人 チエ、忝い

ト兩人尊像をふし拜ミ嬉しきこなし此内しうか心付

女姿に成り肌ぬぎかけにて起上り抱子を見て

(六十八丁ウ)

しうか かわいや我子ハ

ト手負ながら抱子をいだく団十郎恟りして

団 ヤ、そなたはお松

しう ヲ、おまへハお目が見ゆるかいなア

勘 何自来也とい、し盜賊ハ

団 今の今迄女房とハ露しらず何ゆへ有て此姿

勘 コリヤ／＼悴女房といやるからハ

団 文通にて申上たる鎌倉表でなれそめし

勘 アノみぢん流の劔術に手練なしたと聞及ぶ

しう みぢんのお松と申ふづ、かものあなたハ大事の舅御さま

勘 エ、そんなら殺せしおさなごハ

団 あなたのうい孫まさの介

しう 現在あなたの

勘 孫で有ツたか孫かいやい ト抱取

(六十九丁オ)

(ここに貼り紙後出)

悴かわい、事をコレお松二年振りにて廻り逢ひ我子とて

嬉しさもどふぞ親人のおめいをはらし初孫の雅の介をお

目につけわれも眼病平癒して顔見たいと思ひし事もいす

かのはし
 勘 ても、親も此ち、も死に顔に對面するいんくわが又と有ふ
 かいやい

しう
 サ、そのお恨ミハ御尤ながら女だてらに盜賊の張本なり
 となんとおまへにあかされ升うあなたのお手に懸ツて死
 るハわたしが本望此身のい、わけこちの人舅御さま○御
 聞被成て下さり升

兩人
 や、なんと ト誂らいの合方

しう
 サア尊像の紛失よりお行衛知れず慥に本国越後路とお跡
 をしたい来る道にて山賊にたばかられつれ行先キハ黒姫
 山尾形自来也が住家にてそいぶしせよとむたいの有るぜ
 うのがれん手だてなくゆへに見らるゝ通りの懷妊ゆへ産
 なしなバしたがわんとだましすかして折を伺ひ酒にてう
 ぜし夜半を幸ひ忍びよつて自来也をさし殺しさ、ゆる手
 (六十九丁ウ)

(六十九丁ウ)

下五六人同じ様に切りなせし手なミにおそれ今よりして
 我を二代の自来也とあがめしこそくつけふいつぞや御実
 父甚右衛門様預りの劔キ紛失より重きおとがめ又二ツに
 ハ我妻の落度と成たる尊像の有家を尋ねお二人りを世に
 出さんと諸くへ入り込ミさがせ共かいくれしれづなさ
 けないハ信濃川にて大小立派な旅の侍手にかけて跡に残
 りし両掛に夏目四郎左衛門と印せしを見るに恟り跡での
 くやみエ、情ない舅御さまともしらずして打たもいんぐ
 わ御宝手に入らバ名乗ツてうたる、心でおり升る
 エ、エスリヤ養父四郎左衛門さまを信濃川にてその方が

しう
 つるぎと見れば旅人を偽りすかしてわが手にかけ

勘 夫トが難義を救わんと心を砕く甲斐もなく

団 思ひがけなき女房が世渡り現在親御と露しらず付たもい
 んぐわ討たる、もいんぐわと因果の親子同土情ない事し
 てくれたなア○そののミならず

(七十丁オ)

親人さまを助んと入り込ミしを宝の手筋と盜賊をとらへ
 て見れば我子とも

勘 孫共しらずさいぜんもむごい呵責にくるしませしぢいハ
 牛頭馬頭此世から

しう
 親子くがあびせうねつ

団 約束事とハイ、ながら

勘 敵同士の嫁しうと

しう
 いんぐわどうしの

三人
 寄り合じやなア

ト此内後口へこま蔵出か、り此時前へ出て

高麗蔵
 ホ、ウみたりのしうせうさつし入る

団 や、あなたハ名越

勘 長兵衛どの

団 イザ尊像を ト高麗蔵に渡す

(七十丁ウ)

高 ホ、あつばれいさいハあれにてつぶさに聞女に稀成るお
 松が貞操

勘 デモ盜賊の

しう
 しおきハ目前劔の山かふなり果るハ舅御様をお手にかけ

たる申^(マコ)申^(マコ)下我手に白刃を首へかけうつとりして落ち入る

(七十二丁ウ)

軍八お立やれ

高 勇士も及ぬ
けなげな嫁が最期じやなア

トなき入りながらこなし此時向うばたくに成前ま

くの橘蔵うら打にせし密書持一さんに出て来り

橘蔵 若旦那これにヲ、大旦那様もお出被成升たか紛失の劔の

行衛がしれ升た

団 汝ハ源吾

勘 シテく様子ハ

(七十二丁オ)

橘 おいとまもろふてその後ハ自然と覚へた経師屋渡世最せん

新渴の稽古より頼ミに来たる急ぎの仕事八彦明神の画像の

かけものの中引裂キうら打にはつたる書物イザ御覽被成升

団 何書物トハ○ トよみ下し

フム此文面の様子でハ小狐丸を盗せしその頼てハ鹿野苑

軍八にて有りしよな

勘 ム、スリヤ最前の様子とい、劔に人目を憚らバ慥にくせ

もの

高 いそふれ者共早参れ

四人(貼紙)「ハアく トいぜんの中通り」四天出て来る

団 其方共ハ奥へふん込ミ軍八を

四人 心得升た○

ト団十郎奥へ行ふとする早舞に成り四人ばらくと

襖の内へは入る

団 扱こそ小狐丸を奪ひしハ軍八に相違ないサア真直に白状

いたせ

友右衛門 ヤアちよこ才な刃向ひ立じたばたすりやア命がねへぞ

四人 何をこしやくな

ト一寸立廻り四人をポンくと切返し急度成る是を

どろく雷序に成り上下に狐火出る皆く是に目

を付急度見得

高 ハテ心得ぬ血汐の穢れに此場のどうやふ

勘 数夕の狐火あたりをてらし

やかたの内を守護なす有さまフムやぶれかぶれだ

友 ト早舞団十郎に打て懸る此時中通り四人かゝる立廻

り勘弥

(七十二丁オ)

こま蔵に懸る団十郎かいくゞりて友右衛門の柄元

を急度おさへ

団 焼刃鉄色紛れもなきお家の重宝小狐丸

友 何を

トふりほだいて切てくるを団十郎打落ス勘弥立廻り

ながら取上る団十郎抜打に友右衛門を切り下かへ

す刀を脇腹へ突立る

団 主ばつ天ばつ思ひしつたか

勘 イザ長兵衛どの

高 ホウ二品揃へて

団 御ぜんよしなに ト刀を引き友右衛門にとゞめをさす
勘 御ひろう願ひ

団 奉る ト半天侍を引付ける又かゝるを団十郎きりかへし
(七十二丁ウ)

団 東西まづ今日は是切り

ト目 出度 打出 し

(七十三丁オ白紙)

(七十三丁ウ)

嘉永四辛亥年九月大吉日

紙員 十五葉

千穂 万歳

大入 叶

本主 松島松作

(裏表紙)

(六十九丁貼り紙)

「○しうか落入らぬ書入

三人 より合じやなア

ト此時後ろへこま蔵出がゝり此時前へ出て

こま蔵 ホ、ウ三人りのしうせうさつし入る

団 ヤ、あなたは名越

勘 長兵衛どの

団 イザ尊像を トこま蔵に渡ス

こま ホ、ウあつばれいさいハつぶさに聞た女に稀成るお松が

勘 貞操
デモ盗賊の
仕置ハ目前劔の山かふ成り果るハ舅御さまをお手にかけ

しう たる申訳

高 ト死ふとするを

これ待お松親をがいせし我手の覚期ハ聞へたり今一品の

御劔出ざる其内に相果たれば是迄尽した夫トへ忠義が無

しえ 成るぞよ

エ、
ハテ死ハ安しせく所じやあるまいがや

ト此時向ふばたゞに成り前まへの橘蔵うら打にせ

し密書を持いつさんに出て

若旦那是にヲ、大旦那様もお出被成升たか紛失の劔の行

衛がしれ升した

汝ハ源吾

シテく様子ハ

おいとま貰ふて其後ハしぜんと覚へた経師屋渡世さいぜ

ん新潟の稽古所より頼ミに来たるいそぎの仕事ハ彦明神

の画像のかけもの中より引さきうら打に張つたる書物イ

ザ御覽被成升

ナニ書物とハ○ トよみ下し

フム此文面の様子でハ小狐丸を盗せしその頼てハ鹿野苑

軍八にて有りしよナ

